とある魔法の召喚獣

Lyrical

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある魔法の召喚獣

【Ｎコード】
Ｎ４０３４Ｔ

【作者名】
Ｌｙｒｉｃａｌ

【あらすじ】
通常のバカテスに不幸なフラグ建築士や白い魔王を始めとしたキャラが混ざって始まるクロスオーバー学園ストーリー

「なんでこんな目にぃぃぃっ！！」
「いいぜ、まずはそのふざけた幻想をぶち殺す！」
「リリカルマジカル頑張ります！」

キャラ設定　改

―禁書サイド―

上条当麻
右手に幻想殺しがないので不幸が少し減っている。現国だけ学年トップクラス。他はＦクラスの中の上。なのは、美琴に好意を寄せられているが、超がつくほどの鈍感なので気づいていない。観察処分者。
腕輪（召喚獣）の能力：幻想殺し
観察処分者として渡されている。腕輪ではなく、召喚獣自体に宿っている能力。効果は相手の腕輪の能力を全て無効にする。謎の力が宿っているらしい。

御坂美琴
当麻に好意を持っている。いわゆるツンデレ。妹がいて、一方通行になついている。Ｂクラスの主力の１人。
腕輪の能力：超電磁砲（レールガン）
美琴の代名詞。フィールドの端から端まで届く射程距離がある。（１発に２００点消費する）
一方通行（アクセラレータ）
学年主席。悪鬼羅刹と並び最強の不良として恐れられている。フェイトと付き合っている。
腕輪の能力：ベクトル操作触れたもののベクトルを操作する。（１５分間のみ発動することができる。１５分過ぎると腕輪の効果がなくなり、３００点消費する）学園最強の腕輪。

―リリなのサイド―

高町なのは
当麻に好意を持っている。フェイトとはやての親友。怒ると二大不良も恐れるほど怖い。養子の女の子がいる。
腕輪の能力：ＳｔａｒｌｉｇｈｔＢｒｅａｋｅｒ　一撃必殺の砲撃（２５０点消費する）砲撃系最強。

フェイト・Ｔ・ハラオウン
なのはとはやての親友。　一方通行と付き合っている。何事においても万能。一方通行の弱点の１人。腕輪の能力：真・ソニックフォーム
防御を捨てて、攻撃に特化した姿。（変身時に２００点消費する）

八神はやて
なのはとフェイトの親友　家に四人ほど居候している。
腕輪の能力：ラグナロク
広範囲の砲撃のぶんなのはのスターライト・ブレイカーに劣るがかなりの威力を持っている（消費は一発につき、２００点）もうひとつの能力としてリインフォースを召喚することができる（召喚時に５０点消費する）

キャラ設定　改（後書き）

どうだったでしょうか？　何か意見がありましたら感想に書いてください。　見てくれてありがとうございました。

第0問　プロローグ

ＳＩＤＥ明久
「当麻のせいで遅刻しそうじゃないか」
僕は、隣で走っている親友に声をかけた。
「目覚ましが壊れてたんだよ、不幸だ」
いつものことじゃないかと僕は心の中でツッコミをした。
「吉井、上条遅刻だぞ」
玄関の前で一人の教師に呼び止められた。
「「げっ、鉄じ・・・じゃなくて西村先生。おはようございます」」
「今、鉄人って言わなかったか？」

「ははっ、気のせいですよ」
「そうだぜ、気のせいじゃないのか？」
当麻も相槌をうった。危なかった。
「まぁ、いい。ほら、受け取れ」
先生が封筒を僕たちに差し出してきた。
「吉井、上条、今だから言うがな」
「なんですか？」
「なんだ？」
「俺はお前らを去年一年見てきて、『もしかすると、こいつらバカなんじゃないか？』なんて疑いを抱いてたんだ」
「それは間違いですね。そんなようじゃ、さらに変な渾名をつけられちゃいますよ？」
「ああ、先生は自分の間違いに気づいたよ」
さて、僕はどのクラスなんだろう。当麻はＦクラスだろうけど。
「喜べ、お前らへの疑いはなくなった」
折り畳まれた紙を開き、書かれているクラスを確認する。
『吉井明久・・・Ｆクラス』『上条当麻・・・Ｆクラス』

「お前らは正真正銘のバカだ」

こうして僕たちの最低クラス生活が幕を開けた。

第０問　プロローグ（後書き）

小説を書くのって大変です。次回はＦクラス所属のメンバーが登場します。誤字・脱字・意見などありましたらぜひ教えてください。次回の更新はいつになるのやら・・・

第1問　自己紹介

明久ＳＩＤＥ
明久「・・・なんだろう、このばかデカい教室は、ねぇ当麻」
当麻「どうでもいいけど不幸だ・・」
僕らはＡクラス前を過ぎようとした時に、１人の女の子とすれ違った。
??「いたいた、見つけたわよ！」
当麻「げっ、ビリビリ」
??「私には、御坂美琴って名前があるって何回言えばわかるのかしら？」
当麻「へいへい、で何のようだ御坂？」
美琴「あんた何クラスなのよ？」
当麻「どうせ上条さんはＦクラスですよ～」
当麻が憎たらしく感じてきた。あ、そろそろ行かないと。
明久「当麻、急がないと」
当麻「忘れてた。じゃあな御坂」
僕らは急いで廊下を進んでいった。

ようやくＦクラスに着いた。さて、入るとしますか。
明久「すいません、ちょっと遅れちゃいました♪」
??「早く座れ、このウジ虫野郎」
僕は睨みつけるように教壇に立っている男を見た。
明久「・・・雄二、何やってんの？」
雄二「先生が遅れているらしいから、代わりに教壇に上がってみた」
明久「先生の代わりって、雄二が？　なんで？」
雄二「一応このクラスの最高成績者だからな」
明久「え？　それじゃ、雄二がこのクラスの代表なの？」
雄二「ああ、そうだ」

僕が雄二とそんな話をしていると・・・

「え～、みなさん席に座ってください。ＨＲをはじめます」
先生「おはようございます。ニ年Ｆ組担任の福原慎です。よろしくおねがいします」
先生は黒板に名前を書こうとしてやめた。チョークすらまともに用意されてないよ。
福原「では、自己紹介でも始めましょうか。廊下側の人からお願いします」

秀吉「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる。今年一年よろしく頼むぞい」

康太「・・・土屋康太」

美波「島田美波です。海外育ちで、日本語は会話はできるけど、読み書きが苦手です」
良かった。最低でも一人は女の子がいるみたいだ。
美波「趣味は吉井明久を殴ることです♪」
誰だっ！？そんな危険な趣味をもつひとは！
美波「はろはろー」
明久「・・・あぅ。し、島田さん」
美波「吉井、今年もよろしくね」

なのは「高町なのはです。よろしくお願いします。」

「うおぉぉぉぉぉぉ」

高町さんの自己紹介のときにクラス中から歓声があがった。

「高町さん。ぜひ僕と――」
「おい、貴様！なにを抜け駆けしているんだ」
「好きです。付き合って――」

なのは「ごめんなさい。私、好きな人がいるので・・」

そう言いながら高町さんがチラチラと当麻のことを見ている。まさか高町さんの好きな人って。

当麻「上条当麻だ。まぁ、よろ「くたばれー！」うぉ、いきなり何だ。明久」
明久「この男の敵め！今、ここで「えっと、吉井君だっけ。上条君に攻撃するなら・・」すいませんでしたっ！（土下座）」

当麻「ありがとう。高町」
なのは「名前で呼んでいいよ／／」
当麻「わかった。なのは
、よろしくな。俺も名前で呼んでいいぞ」
なのは「うん／／と、当麻君／／よかったら番号交換しない？」
当麻「いいぜ。またあとでな」

なんか当麻と高町さんの周りに桃色空間ができているのは気のせいだろうか？あ、次は僕の番か。

明久「吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んでくださいね♪」

『ダァァーーリィーーン！！』

うっ、不愉快だ。

明久「―失礼。忘れてください。とにかくよろしくお願いします。」

ガラリ

不意に教室のドアが開き、女子生徒が現れた。

??「あの、遅れて、すいま、せん」

『えっ？』

福原「丁度良かったです。今自己紹介をしているところなので姫路さんもお願いします」

瑞希「は、はい！あの、姫路瑞希です。よろしくお願いします・・」

「はいっ！質問です！なんでこんなところにいるんですか？」

聞きようによっては失礼な質問が浴びせられる。

瑞希「振り分け試験の最中、高熱を出してしまいまして」

『そう言えば、俺も熱（の問題）が出たせいで』

『ああ。化学だろ？アレは難しかったな』

『前の晩、彼女が寝かせてくれなくて』

『今年一番の大嘘をありがとう』

これは想像以上にバカだらけだ。

瑞希「き、緊張しました～」

明久「あのさ、姫「姫路」」

瑞希「は、はいっ。何ですか？えーっと・・・」
雄二「坂本だ。坂本雄二。よろしく頼む」
瑞希「あ、姫路です。よろしくお願いします」
雄二「ところで、姫路の体調は未だに悪いのか？」
明久「あ、それは僕も気になる」
瑞希「よ、吉井君！？」
雄二「姫路。明久がブサイクですまん」
瑞希「そ、そんな！目もパッチリしてるし、顔のラインも細くて綺麗だし、全然ブサイクなんかじゃないですよ！っその、むしろ・・・」
雄二「そう言われると、確かに見てくれは悪くない顔をしているかもしれないな。俺の知人にも明久に興味を持っている奴がいたような気もするし」
明久「え？それは誰―」
瑞希「そ、それってだれですかっ！？」
雄二「確か、久保――――利光だったかな」

久保利光→♂（性別／オス）

明久「・・・・・・」
雄二「おい明久。声を殺してさめざめと泣くな。半分冗談だ。安心しろ」
明久「え？残り半分は？」
雄二「ところで姫路。体は大丈夫なのか？」
瑞希「あ、はい。もうすっかり元気です」
明久「ねぇ、雄二！残りの半分は！？」

福原「はいはい。そこの人たち、静かにしてくださいね」

パンパン、と先生が教壇を叩きながら注意してきた。

明久「あ、すいませ――」

バキィッ　バラバラバラ・・・

教壇が崩れ落ちてゴミ屑と化す。

福原「え～・・・替えを用意してきます。少し待っていてください」

瑞希「あ、あはは・・・」

隣で姫路さんが苦笑いをしていた。

明久「・・・雄二、ちょっといい？」

雄二「ん？なんだ？」

明久「ここじゃ話しにくいから、廊下で」

雄二「別に構わんが」

二人は廊下に出て行った。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

当麻ＳＩＤＥ

え～、私上条当麻は今、美少女と話している。なんて幸せなんだ。

なのは「ちょっと、当麻君。聞いてる？」

当麻「ああ、番号の交換だろ。先生もいないし、今のうちにしようぜ」

なのは「うん／／」

なのはの顔が赤い。熱でもあるのか？

ピッ・・・ピッ・・・

なのは「よし、終わった~」

当麻「そうだな」

なのは「ねぇ、当麻君。今度、暇な時に私の家来ない？／／いやだったらいいけど・・」

当麻「そんなことないでせうよ。一人だと恥ずかしいから友達連れてってもいいか？」

なのは「あ、うん。私も呼んどくね（ほんとは二人きりが良かったけど／／）」

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

明久ＳＩＤＥ

雄二「先生が戻ってきた。教室に入るぞ」

明久「あ、うん」

今、僕たちは試召戦争について話していた。せもちろん目標はＡクラスだ。雄二も作戦があるらしい・・

福原「さて、自己紹介の続きをお願いします」

須川「須川亮です。趣味は――」

福原「坂本君、キミが自己紹介の最後ですよ」

雄二「了解」

雄二「Ｆクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ」

雄二「さて、皆に一つ聞きたい」

「この設備に不満はないか？」

雄二は戦争の引き金を引いた。

第1問　自己紹介（後書き）

どうだったでしょうか？
何か感想がありましたらお願いします。
では、また次回をお楽しみに

第2問　宣戦布告（前書き）

思ったより早く書けました。この話で当麻の召喚獣の能力が少し明かされます。

第2問　宣戦布告

明久ＳＩＤＥ
雄二「この設備に不満はないか？」
『大ありじゃぁっ！』
雄二の一言でクラスのみんなが叫んだ。
雄二「さて、これは代表としても提案だが、Ｆクラスは Ａクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」
Ａクラスへの宣戦布告。
『勝てるわけがない』
『これ以上設備落とされるなんてごめんだ』
『姫路さんと高町さんがいたら何もいらない』
そんな声が教室のあちこちから上がる。
雄二「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」
圧倒的な戦力差を知りながらも、雄二はそう宣言した。
『何を馬鹿なことを』
『できるわけないだろう』

『何の根拠があってそんなことを』

否定的な意見が教室を飛び交う。

雄二「根拠ならある。このクラスには勝つための要素がそろっている」

雄二が自信満々にそう言う。

雄二「それを今から説明してやる」

不敵な笑みを浮かべ、檀上から皆を見下ろす悪友。

雄二「おい、康太。畳に顔をつけて姫路と高町のスカートを覗いていないで前に来い」

康太「・・・・・・・・！！（ブンブン）」

瑞希「ひゃあっ」
なのは「わっ」

雄二「土屋康太。こいつがあの有名なムッツリーニだ」

康太「・・・・・・・・！！（ブンブン）」

『ムッツリーニだと・・・？』

『馬鹿な、ヤツがそうだというのか・・・？』

『ああ、ムッツリーニの名に恥じない姿だ・・・』

畳の跡を手で押さえている姿が果てしなく哀れを誘う。

瑞希「???」

姫路さんは頭に多数の疑問詞を浮かべているみたいだ。

雄二「姫路と高町のことは説明することはないだろう。皆だって知っているはずだ」

瑞希「えっ？私ですか？」

なのは「にゃはははは」

雄二「ああ、ウチの主戦力だ。期待している」

確かにあの二人はとてつもない戦力になりそうだ。

『そうだ。俺たちにはこの二人がついているんだ』

『彼女たちならAクラスに引けをとらない』

『まったくだ。彼女たちがいるなら何もいらない』

雄二「木下秀吉だっている」

『おお・・・・！』

『ああ。アイツ確か、木下優子の・・・』

雄二「当然俺も全力を尽くす」

『確かになんだかやってくれそうな奴だ』

『坂本って、小学生のころは神童とか呼ばれていなかったか？』

『つまり、このクラスにはＡクラスレベルが三人もいるってことだよな！』

いけそうだ、やれそうだ、そんな雰囲気が教室に満ちていた。

雄二「それに、吉井明久だっている」

・・・・シン――

そして一気に下がる。

明久「ちょっと雄二！どうして僕の名前を出すのさ！全くそんな必要は無かったよね！」

『誰だよ、吉井明久って』

『聞いたことないぞ』

明久「ほら、皆の士気が下がってきてるじゃないか！」

雄二「皆、知らないのか。こいつは≪観察処分者≫だ」

『それってバカの代名詞じゃなかったっけ？』

明久「ち、違うよっ！ちょっとお茶目な十六歳につけられる渾名で」

雄二「そうだ。バカの代名詞だ」

明久「肯定するな、バカ野郎！」

瑞希「それって、どういうものなんですか？」

姫路さんが小首を傾げている。

雄二「教師の雑用係だな。しかし特例として物に触れられる」

瑞希「そうなんですか？すごいですね！」

明久「あはは。そんな大したもんじゃないよ」

『おいおい。《観察処分者》ってことは、試召戦争でやられると、本人もくるしいってことだろ？』

『だよな。それならおいそれと召喚できないやつがいるってことだよな』

雄二「気にするな。どうせ、いてもいなくても同じような雑魚だ」

明久「雄二、フォローしてよ・・」

雄二「とにかく、明久のことは置いといて。俺たちの切り札を紹介する」

『切り札・・・？』

『それって、姫路さんや高町さんじゃないのか？』

雄二「当麻。来てくれ」

当麻「わかりましたよっと」

雄二「こいつが切り札だ。」

ええっ！当麻が切り札っ！まじで！

雄二「こいつも観察処分者だ『つまり吉井と一緒―』違う。こいつが観察処分者なのは理事長による命令らしい」

当麻「おまえ、どこまで知ってるんだ？」

雄二「気にするな。こいつの召喚獣は特製で、腕輪の能力を無効にすることができる力をもっている」

なのは「当麻君、すごい」

秀吉「やるのう、当麻」

康太「・・・なかなか」

当麻「そんなすごくねーけどな」

雄二「さて、まずは俺たちの力の証明としてＤクラスを落とそうと思う」

雄二「この境遇は大いに不満だろう？」

『当然だ！！』

雄二「ならば、全員筆を執れ！出陣の準備だ！」

『おおーーっ！！』

瑞希「お、おー・・・」

クラスの雰囲気に圧されたのか、姫路さんも小さく拳を作り掲げていた。

明久「当麻、どうする？」

当麻「やるしかないんじゃないのか？」

なのは「当麻くん、吉井君がんばろうね！」

さて、まずはＤクラスだ！

第2問　宣戦布告（後書き）

どうだったでしょうか？

次回はミーティングになると思います。感想と評価待ってます！

第3問　ミーティング

明久ＳＩＤＥ

雄二「明久にはＤクラスへの宣戦布告の使者になってもらう」

明久「・・・下位戦力の使者ってたいてい酷い目にあうよね？」

雄二「大丈夫だ。やつらがお前に危害を加えることはない。騙されたと思って行ってみろ」

明久「本当に？」

雄二「もちろんだ。俺を信じろ」

明久「なら、当麻も連れていってもいい？」

当麻「上条さんもですか！？」

雄二「ああ、構わない。頼んだぞ」

Ｄクラス

明久・当麻「「失礼しま～す」」

ヒュンヒュン

当麻「うおっと」

カッカッ

何だ?当麻に向かっていきなりシャーペンが飛んできたぞ。

??「お姉様を誑かす類人猿め、今ここで成敗しますの!」

当麻「げっ、白井」

ダッ

黒子「逃げるな!この類人猿!」

ダッ

行ってしまった・・・。

あ、宣戦布告しないと。

明久「僕たちFクラスはDクラスに試召戦争を仕掛けます」

『何、Fクラスのくせに生意気な』

『やっちまえ!!』

黒子「待ちなさいですの」

ヒュンヒュン

当麻「危ねぇー!」

明久・当麻「「不幸だぁぁぁ!!」」

Fクラス

明久「騙されたぁっ！」

僕と当麻は命がけで廊下を走り、教室に逃げてきた。

雄二「やっぱりか」

明久「やっぱりってなんだよ！僕たちはもうちょっとで危なかったんだぞ！」

雄二「だから、どうした」

明久「僕たちに謝れよ！」

当麻「ふ、不幸だ・・・」

なのは「当麻君、大丈夫？」

当麻「な、なんとか・・・。少し休ましてくれ。」

瑞希「吉井君、大丈夫ですか？」

ああ、なんて優しいんだろう。どっかの誰かさんとは大違いだ。

明久「あ、うん。大丈夫」

美波「吉井、本当に大丈夫？」

明久「平気だよ。心配してくれてありがとう」

美波「そう、良かった・・・。ウチが殴る余地はまだあるんだ・・・」

明久「ああっ！もうダメ！死にそう！」

優しくしてくれるのは姫路さんと高町さんしかいないのか？

雄二「そんなことはどうでもいい。それより今からミーティングを行う。明久、姫路、島田、秀吉、ムッツリーニ、当麻、高町。いっしょに来てくれ」

屋上

雄二「明久。宣戦布告はしてきたな？」

明久「一応今日の午後から開戦予定と告げてきたけど」

美波「それじゃ、先にお昼ご飯ってことね？」

雄二「そうなるな。明久、今日ぐらいまともな物を食べろよ？」

明久「そう思うならなにかおごってよ」

瑞希「吉井君って、お昼食べないんですか？」

姫路さんが驚いたようにこちらを見る。彼女は規則正しい生活をしていそうだ。

明久「いや。一応は食べてるよ」

雄二「・・・あれは食べているというのか？」

当麻「上条さんもそう思うぜ」

明久「そんなことないよ！きちんと水と塩と砂糖を食べているさ！」

仕方ないじゃないか。ゲームや漫画に使っちゃうんだから。

瑞希「・・・あの～、良かったら私が作ってきましょうか？」

明久「ゑ？」

僕は一瞬耳を疑った。

明久「本当にいいの！？」

瑞希「はい。明日のお昼で良ければ」

雄二「良かったじゃないか明久。手作り弁当だぞ？」

明久「うん！」

美波「・・・ふーん。瑞希って随分優しいんだね。吉井だけに作ってくるなんて」

島田さん！なんてことを言うんだ！

瑞希「あ、いえ！皆さんにも・・・」

雄二「俺たちにも？いいのか？」

秀吉「楽しみじゃのう」

康太「・・・・・楽しみ」

美波「・・・お手並み拝見ね」

当麻「けど、８人分って大変じゃないか？俺の分は無理しなくていいぞ」

なのは「そうだよ。あ、当麻君！私が当麻君の分作ってこようか？そうすれば瑞希ちゃんの負担も少なくなるし・・・」

当麻「確かにそうだな。よろしく、なのは！」

なのは「う、うん・・・／／」

当麻「どうした、顔赤いぞ。熱でもあるのか？」

「「「（この鈍感野郎・・・）」」」

秀吉「雄二。一つ気になるのじゃが、どうしてＤクラスなのじゃ？」

瑞希「そういえば、確かにそうですね」

雄二「理由は簡単だ。戦うまでもない相手だからな」

明久「え？でも、僕らよりクラスは上だよ？」

雄二「明久。周りを見てみろ」
明久「えーっと、美少女が三人と馬鹿が二人とムッツリが一人と不幸が一人いるね」
雄二「誰が美少女だと！？」
康太「・・・（ポッ）」
なのは「私ってそんな印象なんだ・・・」
明久「ええっ！？皆勘違いしていない！？」
秀吉「まぁまぁ、冗談はよすのじゃ」
雄二「（コホン）まぁ、ようするに姫路に高町に問題がない今、Ｅクラスには勝てる。だがＤクラスはどうだか分からない」
明久「だったら、最初からＡクラスに挑もうよ」
僕の目標はＡクラスなんだ。試召戦争自体が目的じゃない。
雄二「初陣だからな。派手にやって景気づけにしたいだろ？さっき言いかけたＡクラス打倒に必要なプロセスだしな」
瑞希「えっと、その。吉井君たちは前から試召戦争について話していたんですか？」
雄二「ああ、それか。それはさっき、明久に「それはそうと！」―

―」

明久「さっきの話、Ｄクラスに勝たなきゃ意味がないよ」

雄二「負けるわけがないさ。お前らが協力してくれれば必ず勝てる。いいか、俺たちのクラスは――最強だ」

不思議だ。根拠のない言葉なのに、なぜかその気になってくる。

美波「いいわね。面白そうじゃない！」

秀吉「そうじゃな。Ａクラスの連中を引きずり落としてやるかの」

康太「・・・・（グッ）」

瑞希「が、頑張りますっ」

なのは「任せて！」

当麻「はぁ～、しょうがない。いっちょやってみるか」

雄二「そうか。それじゃ、作戦を説明しよう」

僕たちは勝利の為の作戦に耳を傾けた。

第3問　ミーティング（後書き）

感想待ってます！次回はＤクラス戦です。当麻となのはの存在がどう影響を及ぼすのでしょうか。次回もよろしくお願いします。

第４問　ｖｓＤクラス？（前書き）

今回の話ではあの４人組が登場します。ではっ、始まります！

第４問　ｖｓＤクラス？

「吉井、木下たちがＤクラスの連中と交戦状態に入ったわよ！」

ポニーテールを揺らしながら島田さんがこっちに駆けてきた。改めて見ると、背は高くて脚も綺麗なのに、どこか女性としての魅力に欠ける。一体なにが足りないんだろう。

「ああ、胸か」

「アンタの指を折るわ。覚悟はいい？」

マズイ、このままじゃ僕の指が。

「そ、それよりホラ、今は試召戦争に集中しないと！」

さて、今の状況は？

『さぁ、来い！この負け犬が！』

『て、鉄人だぁ！嫌だ！補習室は嫌なんだっ！』

『黙れ！捕虜は全員この戦闘が終わるまで補習室で特別講義だ！終戦まで何時間かかるかわからんが、たっぷりと指導してやるからな』

『た、頼む！見逃してくれ！あんな拷問耐えられる気がしない！』

『拷問？そんなことはしない。これは立派な教育だ。そうだろう、

皆？』

『ええ、その通りね（ジャラ）』

『まったくですね～』

『うむ、その通りなのである』

『俺様もそう思うな』

『何なんだよ、あんたらは！？』

『俺様たち5人は生活指導担当≪神の右席≫だ』

『・・・・は？よくわからんのですけど』

『黙れ、ともかく補習が終わる頃には趣味が勉強、尊敬するのは二m『俺様』という理想的な生徒にしてやろう』

『ちょ、ちょっといきなり何なんだよそこの赤い服着てる先生！尊敬する人が俺様って！』

『そのままの意味だが？』

『意味分からね『さて、運んでくれ』『了解したのである（フン！）』え、え？誰か助け――イヤァァ――（バタン、ガチャ）』

まずい、戦死したらヤバい。

「島田さん、中堅部隊全員に通達」

「ん、なに？作戦？何て言うの？」

さて、ここで言うべきことは一つ。

「総員退避、と」

「この意気地なし！」

殴られた、しかもチョキで。

「目が、目がぁっ！」

「目を覚ましなさい、この馬鹿！アンタは部隊長でしょう！臆病風に吹かれてどうするのよ！」

「ごめん。僕が間違っていたよ。補習室を恐れずにこの戦闘に勝利することだけを考えよう」

「ええ、それにそこまで心配することもないわ。危なかったら多対一で戦えばいいのよ」

「うん、そうだね。よし、やるぞ！」

「うん。その意気よ、吉井！」

僕たちがやる気を出していると、島田さんのところに報告係がやってきた。

「島田、前線部隊が後退し始めたぞ！」

「総員退避よ」

さっきと言ってることが全然違う！

「よし、逃げよう。僕らには荷が重すぎる」

「そうね、ウチらは精一杯努力したわ」

Fクラスに戻ろうとしたとき、本陣に配置されているはずのクラスメイト、横田君がいた。

「横田じゃない。どうしたの？」

「代表より伝令を受けてきました」

「『逃げたらコロス』と」

「全員突撃しろぉーっ！」

気が付いたら戦場に向かって全力ダッシュをしていた。それもこれもFクラスの勝利を思ってのこと。と、前方からこちらに向かって走ってくる美少女を発見。

「明久、援護に来てくれたのじゃな！」

「秀吉、大丈夫？」

「うむ、戦死は免れておる。じゃが、点数はもう限界じゃ」

「そうなの？召喚獣の様子は？」

「かなりヘロヘロじゃ。これ以上はちときついのう」

「早く戻ってテストを受けなおしてこないと」

「そうじゃな、すまぬが少し持ちこたえておいてくれぬか」

秀吉はそう言いながら教室に向かって走っていった。

「吉井、見て！」

「五十嵐先生と布施先生よ！Ｄクラスの連中、化学で勝負するつもりね！」

そっか、立会人を増やして一気に片をつけにきたってワケか。

「島田さん、化学に自信は？」

「全くなし。６０点台常連よ」

なるべく、五十嵐先生と布施先生に近づかないようにしないと。

「見つけました、美波お姉さま！先生、こっちに来てください！」

「くっ、ぬかったわ！」

Ｄクラスの一人に見つかってしまった。このままじゃ二人とも戦死だ。

「よし、島田さん。ここは君にまk「逃がしませんの」」
しまった。僕も見つかってしまった。やるしかないっ！
「「――試獣召喚っ（サモンっ）！」」

現れた召喚獣は島田さんのが軍服にサーベルで、その相手の方の武器は普通の剣みたいだ。
白井さん？だっけ。彼女の召喚獣は制服に鉄矢を持っている。

Ｆクラス　吉井明久＆島田美波　ＶＳ　Ｄクラス　白井黒子＆清水美春
化学　４７点＆５３点　ＶＳ　化学　１０３点＆９４点

「行きます、お姉さま！」
「はあぁぁっ！」
「やあぁぁっ！」
「こっちも行きますの！」
「くっ！」

「こ――のっ！」

「負けません！」

「し、島田さんっ！」

「よそ見している暇は無いですの！」

島田さんの援護に行きたいけど行く余裕が全然ない！

「ここまでですっ！」

「くぅっ！」

「こちらもですの！」

ヒュンヒュン

「しまっ――（グサッグサッ）」

痛っ！フィードバックの痛みが・・・。

「さ、お姉さま。勝負はつきましたね？」

「嫌ぁっ！よ、吉井！助けて！」

ご、ゴメン島田さん。僕ももう戦死しそうだ・・・。

「さっ、とどめですの」

ちくしょう！誰か！助けて！

「ディヴァイィィンバスタァァァーー！！！」

ドゴォォン

「大丈夫？美波ちゃん、吉井君？」

「高町さん（なのは）！？どうしてここに？」

「坂本君の指示でね。前線がそろそろきつくなるかもしれないから援護に向かってくれって言われたの」

なるほど、そういうことか。

「そういうことだから後は私に任せて。――試獣召喚っ（サモンっ）」

Ｆクラス　高町なのは　ＶＳ　Ｄクラス　白井黒子＆清水美春

化学　４２６点　ＶＳ　化学８７点＆６３点

「くっ、なんて点数ですの」

「じゃあね、シュート！！」

ドカンドカン

高町さんの召喚獣が放った桜色の光線が敵の召喚獣を撃ちぬく。

よしっ、二人とも撃破したぞっ。さすが高町さん！

「なのは、助かったわ。西村先生！早くこの二人を補習室に！」

「おお、清水に白井か。たっぷりと補習してやるからな」

二人は鉄人に補習室に連れられていかれた。

「二人ともっ！このまま前線を維持するよ！」

「分かったわ！」

「皆、前線を維持するんだ！これ以上進ませないように！」

僕は部隊の皆に指示を出す。

「させるな！一気に攻め落とせ！」

相手の方も命令を出してきた。

ここが正念場だ。気合を入れていかなくちゃ！

第４問　ｖｓＤクラス？（後書き）

前書きで言った人が誰だか分かったでしょうか？
書き方なんですがセリフの前に名前をつけたほうがいいのでしょうか？それとも無いほうがいいですかね？
感想や指摘待ってます！

第5問　ｖｓＤクラス？（前書き）

今回の話は途中まで試召戦争ですが、その後は明久がある人物による指導を受けます。では、見てください！

第5問　ｖｓＤクラス？

「吉井隊長！横溝がやられた！これで布施先生側は残り二人だ！」
「五十嵐先生の通路だが、現在俺一人しかいない！援軍を頼む！」
「藤堂の召喚獣がやられたそうだ！助けてやってくれ！」

想像以上に劣勢だ。
高町さんが頑張っていてくれてるけど一人できつそうだ。本陣に援軍を要請したら作戦につぎ込む戦力がなくなってしまう。ここは僕らだけで持ちこたえるしかない！

「布施先生側の人達は召喚獣を防御に専念させて！五十嵐先生側の人は総合科目の人と交代しながら勝負するように！高町さんは全体の援護をお願い！」

『了解！』

「分かったよ！」

皆が僕の指示に従って陣形を組み始める。一応隊長として扱ってくれているみたいだ。

「Ｆクラスめ、時間稼ぎが目的か！」
「何を待っているんだ！？」

戦い方を見て、Ｄクラスの連中が僕らの意図に気づき始めた。まずいな、やりづらくなるぞ・・・。

「須川君！」

「なんだ？」

「偽情報を流して欲しいんだ。時間を稼ぐために」

「偽情報？それは構わないけど、スグにバレるんじゃないか？」

「大丈夫。対象はＤクラスじゃないから」

「と、言うと？」

「先生たちに流すんだよ。他の場所に向かってくれるように」

「なるほど。流す偽情報は任せてくれ。確実に騙してみせよう」

「うん。頼むよ」

須川君はそう言って、駆け足でこの場を去っていった。

『塚本、このままじゃ埒があかない！』

『もう少し待っていろ！今数学の船越先生を呼んでいる！』

僕らＦクラスにとって、好ましくない会話が聞こえてきた。このままじゃ戦線が拡大されて不利になってしまう。僕も戦闘に参加するべきか。

ピンポンパンポーン《連絡致します》

この声は須川君か？放送で先生を呼ぶつもりだね。ファインプレイだよ須川君！

《船越先生、船越先生》

《吉井明久君が体育館倉庫裏で待っています》

・・・・え？

《生徒と教師の垣根を越えた、大事な話があるそうです》

「吉井隊長、あんた男だよ！」

「ああ。まさかクラスの為にそこまでしてくれるなんて！」

ち、違う。これは誤解だ！

『おい、聞いたか？今の放送』

『ああ。Ｆクラスの連中は本気だぞ』

『あんなに確固たる意志を

持っている奴らに勝てるのか？』

やめて！戦場に良い影響を与えないで！

「皆、吉井隊長の死を無駄にするな！」

「絶対に勝つぞーっ！」

ああ！うちのクラスの士気まで！もうやめてぇ！

「隊長行きましょう！」

「・・・・・・」

「隊長？」

「須川ぁぁあああああっ！」

☆

「工藤信也、戦死！」

「西村雄一郎、残り４０点です！」

「森川が戻ってこない！やられたか！？」

とうとう戦力差が出始め、次々と景気の悪い報告が聞こえてきた。

「明久、あと少し持ちこたえろ！」

声が聞こえたので、辺りを見回してみる。と、僕らの遥か後方から雄二たちの姿が見えた。援軍だ！助かった！

「援軍が来たぞ！吉井たちと合流させるな！」

マズイ、逃げないと！

「皆、退避っ！」

「逃がすか！」

くっ、追いかけてきたか。

「吉井、ここは俺に任せて先に行け！」

近藤君！ありがとう！

「Ｆクラス近藤、行きます！」

「試獣召喚！（サモン）」

『Ｆクラス　近藤吉宗　ＶＳ　Ｄクラス　中野健太
化学　９１点　ＶＳ　４３点』

「くっ、ここは退くぞ！全員遅れるな！」
敵部隊が逃げ始めた。
「深追いはするな。俺たちも一旦戻るぞ」
僕らは体制を立て直す為、戦場を後にした。

☆

教室に戻り、テストを受け直した後、
「明久。よくやった」
と、雄二から褒められたあの雄二がこんな事を言うなんてどんな風の吹き回しだろう？もしかして・・・。
「校内放送、聞いてた？」
「ああ。バッチリな」
やっぱり！僕の不幸を喜んでやがる！こういうのは当麻の役目なのに！
「雄二、須川君はどこ？」
「もうすぐ戻ってくるんじゃないか？」
「よし、僕ならヤれる・・・！」
「ヤるなっての」
「ちなみに、だがあの放送を指示したのは俺だ」

なんだって？コイツが指示した？フッ。

「シャァァァッ！」

僕は服からフランベルジュを取り出し、雄二に切りかかった。狙いは避けにくい肝臓。くらえ！

「フン！」

ガキィィン

アックア先生！？

「吉井。人に剣を振りかざすとは。少し来るのである。」

ええっ！？アンタだってアスカロン持ってんじゃん！

「何か言ったであるか？（ギロッ）」

「いえ！なんでもありません！」

「そうか、坂本。吉井を少し借りていくぞ」

「ええ。お構いなく」

雄二の薄情もん！助けてくれよ！

「さぁ、行くのである」

僕はアックア先生に連れられて生活指導室に連れて行かれた。

～生活指導室～

「さあ、入るのである」
「は、はい・・・（ガチャ）」

何ここ!?何か宗教的なものでもあるの!?

「ん、アックア？こいつは誰だ？」
「例の観察処分者の片割れである」
「ああ。吉井明久か。どうしてここに？」
「指導なのである」
「指導？補習じゃなくてか？」
「うむ、人に剣を向けていたのでな」
「そうか、俺様も一緒にやってやろう」
「助かるのである」

生活指導担当が二人も!?なんてこった・・・。

「では、吉井。
一つ聞くがなぜ剣を振るおうとしたのであるか？」
「そ、それは雄二が・・・」
「何があっても学園内であんな大型の剣を振ってはいけないのである。いいか、剣というものはな・・・・」

5分後

「・・・だいたい剣は騎士や武人が誇りを懸けて戦うときに使うものであって一介の高校生がもっていいものではないのである。私も昔は「アックア」何だ？」
「お前の話長いから俺様は奥の部屋で休んでるわ」
「了解したのである」
「じゃあな、吉井」
「は、はい」

何あの人！？先生の話が長いからって逃げるなんて！僕ももう聞きたくないのに！

「・・・・（ハァッ）」
「どうした？吉井？」
「い、いえ。何でも」
「そうか、座っていて疲れたのか。そうだな奥の部屋に来い」
「え？どうしてですか？」
「いいから、来るのである」
「分かりました」

～武道場～

「先生？ここは？」
「武道場だ」
「どうしてここに？」
「お前、座っているのが嫌になったのだろう？だから俺と手合せしようかと思って。ホラ（ヒュッ）」
「おっと（キャッチ）」
「さあ、構えるのだ」
「え、ちょ、ちょっと待って――「行くのである」

「ええーっっ！」
「ハァッ！」
「ギャアァァッ！」

僕はアックア先生との後、気を失い、Dクラス戦が終わって皆が帰る時に目が覚めた。最後は高町さんと姫路さんのコンビでDクラスの代表を討ち取ったらしい。
どうして僕だけこんな目に・・・。

第5問　ｖｓＤクラス？（後書き）

やっとＤクラス戦が終わりました。次回はお昼休みのある事件です（犠牲者はいったい誰になるのでしょうか？）。
次回もお楽しみに！

第6問　なのはの過去と弁当事件

ふぅ、ようやくアックア先生から解放された。あれは本気でやばかった・・・。全ての原因は・・・。

「お、明久。どこに行ってた？もう戦争は終わっちまったぞ」

こいつだ。さぁて、どうスクラップにしてやろうか。

「明久、アックア先生だぞ」

「さらばっ！」

また指導を受けるのは嫌だぁっ！

「冗談だ、待て明久」

なんて心臓に悪い冗談なんだ。

「次はBクラスを落とす。だから明日は補給テストを受けるぞ」

「わ、わかったよ」

「それじゃ、今日はとりあえず帰るとするか」

「あ！教室に教科書置いてきちゃった」

「・・・あほ。さっさととって来い」

「ごめん、先帰ってていいよ」

「もちろんだ。じゃあな」

僕は雄二と別れ教室に向かっていった。

～Fクラス～

誰もいないと思い、教室に入ると高町さんがいた。

「あれ、高町さん？どうしたの？」

「よ、吉井君？」

高町さんの机の上に一枚の手紙が置かれていた。

すると、風が吹き、手紙が開いてしまった。

「「あ！」」

書かれていた内容は

《当麻君へ、あなたのことが好きです》

「ご、ごめん。わざとじゃn「いいよ」え？」

「せっかくだし、吉井君に話しておくよ。当麻君のことを好きになった理由」

6年前

私は昔テニスをやっていたんだ。あの事故のとき、テニスの練習の帰りが遅くなっちゃったから急いでいたら交通事故に遭っちゃって大けがを負っちゃたの。普通だったら歩くことのできないくらいのけがだったんだけど。カエル顔の先生とスカリエッティ先生のおかげでなんとか歩けるようになったけど左手の損傷がひどくてね、もうテニスができないっていわれたの。それを聞いた私はなんかおか

しくなっちゃってフェイトちゃんと行った買い物の帰りに路地裏に迷いこんじゃったの。そのときに、不良の人たちに絡まれて、どこかに連れて行かれそうになった時に当麻君と一方通行くんが現れたの。

「大丈夫か！？一方通行！そっちの子は助けたか！？」
「ああ、ちゃンと助けたぜェ」
「あの、どちら様ｄ「待てや、オラァっ！」」
「ひとまず、説明は後だ。逃げるぞ！」

5分後

「ふー。危なかった・・・」
「はン、さすが当麻だなァ。あそこまでするなンて」
「仕方ないじゃないでせうか」
「「あの、助けてくれてありがとうございました！」」
「気にしなくていいよ。それより茶髪の子、どうかしたの？元気なさそうだけど」
「あ、え～っと。実は事故で左手をけがしちゃってもうテニスが出来ないっていわれてどうでもいいやってなって「バカヤロー！！」
え？」
「いくらテニスが出来なくたってな。まだやれることがたくさんあるんだよ！だからそれを探せばいいじゃないか！もしお前がテニスしか出来ないって幻想にとらわれているなら俺がその幻想をぶち殺す！！」
「・・・・」
「当麻ァ、時間だ。急がねェと木原くンに怒られちまう」
「ああ、悪い。じゃあな！気をつけて帰れよ！」
「じゃあな・・・」

「「あの、名前を教えてください！」」
「上条当麻だ！」
「一方通行だァ」
「（上条当麻君か・・・／／）」

～回想終了～

「と、いう感じなことがあって私は当麻君。フェイトちゃんは一方通行君のことが好きになったの」
「へぇ～。そうだったのか。でも当麻は高町さんのことを知らなそうだったよね」
「そ、それは。あの時名前いうのを忘れちゃっててて・・・」
「そうか。頑張ってね。僕は応援するよ。」
「ありがとう、アキ君」
「アキ君！？」
「私たちもう友達でしょ？だから私のこともこれからはなのはでいいよ」
「わ、わかった。なのは」
「このことは誰にも言っちゃいけないからね」
「うん」

僕はその後、高町さんと別れ、家に帰っていった。

☆

翌朝、いつも通り学校に向かう。

「おはよー」
「おう、明久。時間ギリギリだな」

「ん、おはよう雄二。あれ？当麻は？」
「まだ来てないぞ」「そう言えば、設備はどうして変わってないの？」
「ああ。それはＤクラスとある取引をしたからな」
「ふ～ん、そうなんだ「不幸だぁぁぁぁっ！」あ、当麻だ」
「みたいだな」
「当麻ァ、待ちやがれェ！」
「どうして上条さんが追いかけられないといけないのでせうか！？」
「てめェが、でたらめなことをいったせいでフェイトにお仕置きされそうなンだよ！」
「いいじゃないか、あんなかわいい子の説教を受けれて！」
「うるせェ！」
あの二人の追いかけっこは鉄人たちに止められるまで続いたらしい。

☆

「づがれだー」
「うむ、そうじゃのう」
「上条さんのライフはもう０です」
４時間のテストが終わり、僕と当麻は机に突っ伏していた。
「よし、昼飯食いに行くぞ！今日は何にすっかな」
雄二からは疲れが感じられない。さすが元神童。
「吉井たちは食堂に行くの？ウチも一緒にいい？」

「島田か。構わないぞ」
「それじゃ、混ぜてもらうね」
「・・・・（コクコク）」

さて、今は待ち望んだ昼休み。何かおいしいものを食べて元気を出すさないと。

「「あの～。皆さん。お昼ご飯作ってきたんですけど」」

立ち上がり、食堂に行こうとしたときに呼び止められた。

「昨日の約束忘れたの？」
「もしかして、お弁当？」
「は、はい！迷惑じゃなかったらどうぞ」
「ありがとう。助かるよ！ね、雄二」
「ああ、そうだな。ありがたい」
「それでは屋上に行くとするかのう」
「そうだな」

こんなところではせっかくの弁当が台無しになってしまう。

「そうか。それなら俺は飲み物でも買ってから行くとしよう」
「ウチも手伝うわ」
「悪いな。頼む」
「おっけー」

雄二と島田さんは財布を持って教室を出て行った。

「僕らも行こうか」
「そうですね」

「なのは、持ってあげるよ」
「あ、ありがとう／／」
屋上につき、準備を始める。楽しみだ。
「あの、あんまり自信はないですけど・・・・」
「はい、これ当麻君の分！」
「ありがとう、なのは。上条さんには女神に見えますよ」
「そんな大袈裟だって・・・／／」
向こうは桃色空間ができている。邪魔しないようにしないと。
「さて、雄二には悪いけど先に――――」
「・・・・・（ヒョイ）」
「あっ、ずるいぞムッツリーニっ」
ムッツリーニがエビフライをつまみ取った。そして、そのまま口に運び――
「・・・・（パク）」
パタン　ガタガタガタガタ
豪快に倒れ、小刻みに震えだした。
当麻ＳＩＤＥ
俺はなのはから弁当をもらい開けてみると、中には卵焼きやウィンナーなどが入っていてとても美味そうだ。

「頂きます」
「・・・・（ドキドキ）」
「・・・・（ヒョイ、パク）」

こ、これは・・・

「う、美味すぎる！（シクシク）」
「ほ、本当？」
「ああ、なのははいいお嫁さんになるよ」
「当麻君がもらってくれるの・・・？／／（ボソッ）」
「なんか、言ったか？」
「な、なんでもないよ！／／」

向こうを見てみると、ムッツリーニ、雄二が倒れていた。何があったんだ！？

「なのは」
「何？」
「ちょっと、姫路と島田を連れて行ってくれないか」
「分かったよ。瑞希ちゃーん。美波ちゃーん」
「なんですか？なのはちゃん」
「ちょっと、歩かない？食後だし運動しないと」
「いいですね。行きましょう」
「（当麻君、後は任せたよ）」
「（ああ、任せろ）」

なのはが姫路と島田を連れ、屋上から去っていった。

「明久、秀吉。何があった？」

「と、当麻。この弁当だよ」
姫路の弁当？なにか入っていたのか？
「仕方ない。俺が食おう」
「ちょ、ちょっと当麻。ヤバいって」
「お前はは女の子の作ってきてくれた料理をのこすのか？」
「そ、それは・・・」
「・・・・（ガツガツガツガツ。チーン）」

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

明久ＳＩＤＥ

「当麻ぁ！」
僕と秀吉の心に一人の英雄の名が刻まれた。

☆

「皆、聞いてくれ」
激しい昼食を終え、のんびりお茶をすする。特に当麻には多く飲ませる。お茶には殺菌作用があるらしい。
「次にＢクラスとやる理由だが。それはどんな作戦でも俺たちじゃ

あＡクラスに勝てないからだ」

確かに

Ａクラスは格が違う。５０人中４０人はまだ普通だが残り１０人がヤバい。特に異常なのが一方通行君。彼は２年生で勝てる生徒がいるのかってくらいの力がある。おそらく僕らが全員で囲んだとしてもほとんどが一撃でやられてしまうだろう。

「それじゃ、最終目標はＢクラスってこと？」

「いいや、Ａクラスをやる」

「雄二、さっきと言っていることが違うじゃないか」

「クラス単位では勝てない。だから一騎打ちをするつもりだ」

「一騎打ち？どうやって？」

「その為のＢクラス戦だ」

「Ｂクラスを使ってＡクラスに攻め込まさせるんだよね」

「さすが高町。その通りだ。しかし、Ｂクラスには注意すべき人物がいる」

「それって？」

「御坂美琴。代表の八神はやて。最後にトリックスターの土御門元春だ」

最初の二人はわかるけど土御門くんはどうして？

「御坂美琴は姫路や高町で何とかなる。しかし八神と土御門が組むと下手したら４０人以上が戦死する」

「どうして？」

「あいつら二人はかなり悪知恵が働くからな。そうだろう？当麻、高町？」

「「・・・・確かに」」

「だが、あきらめる必要はない。だから当麻。今回は出てもらうかもしれん」
「ああ。わかったぜ」
「さて、明久。宣戦布告頼んだぞ」
「断る」
「やれやれ。それならクイズを出す。答えれたら俺が行こう」
「クイズ？」

うーん。ま、問答無用よりはいっか。

「一方通行の能力名は？」
「え？ベクトル操作じゃないの？」
「違うわバカ。《一方通行》だ。後で行って来いよ」
「ちくしょー！」

僕は放課後、Ｂクラスに行き、暴行を受けた。
僕は毎日、こういう役目なのか？

第６問　なのはの過去と弁当事件（後書き）

なのはの過去話はどうだったでしょうか？（ダメダメだと思いますが・・・）
次回はＢクラス戦です。
まずは根本くんを潰してから・・・（ブツブツブツ）。次回もお楽しみに！

第7問　ｖｓＢクラス？

キーンコーンカーンコーン

ついにＢクラス戦が始まった。

「皆！突撃だ！」

『サー、イエッサー！』

雄二の掛け声と共に僕らはほぼ全力で廊下を駆け出した。

「お、遅れ、ました・・・」

姫路さんが後ろからやってきた。全力疾走について来られなかったのだろう。

「来たぞ！姫路瑞希だ！」

Ｂクラスの誰かが叫ぶ。やっぱりばれていたか。

「姫路さん、来たばかりで悪いんだけど・・・」

「は、はい。行ってきます」

戦場に紛れ込む姫路さん。

「長谷川先生、Ｂクラス岩下律子です。Ｆクラス姫路瑞希さんに数学勝負を申し込みます！」

「あ、長谷川先生。姫路瑞希です。よろしくお願いします」

「律子、私も手伝う！」

Ｂクラスが二人がかりで勝負してきた。よほど警戒しているんだろう。

『試獣召喚！』

敵の召喚獣と姫路さんの召喚獣が現れた。

『Ｆクラス　姫路瑞希　ＶＳ　Ｂクラス　岩下律子　＆　菊入真由美
数学　４１２点　ＶＳ　１８９点　＆　１５１点』

「行きます！」

姫路さんが左腕を相手に向けた直後、召喚獣の腕輪が光を発した。

「「きゃあぁぁーっ！」」
「ご、ごめんなさい。これも勝負なのでっ」
「岩下と菊入が戦死したぞ！」
「なっ！そんな馬鹿な！？」

Ｂクラスの皆が驚愕する。無理もない。というか姫路さん、強すぎ。

「中堅部隊といｒ「待ちなさい」み、御坂さん！？」
「私が姫路さんとやるわ」
「す、すいません。お願いします」

「試獣召喚！」

『Ｆクラス　姫路瑞希　＆　Ｆクラス生徒×５　ＶＳ　Ｂクラス
御坂美琴
数学　２１２点　＆　７８点×５　ＶＳ　４０６点』

「全員かかれーっ！」

掛け声と同時に姫路さん以外の皆が攻め込んだ。

ピーン　ズゴーン

「「！？」」

『Ｆクラス　姫路瑞希　＆　Ｆクラス生徒×５
ＶＳ　Ｂクラス　御坂美琴
数学　１５６点　＆０点×５　ＶＳ　２０６点』

御坂さんの召喚獣の腕輪が光ったと思ったら一瞬のうちに攻め込んだ皆が戦死し、姫路さんもダーメジを受けていた。

「これが超電磁砲（レールガン）よ」

このままじゃ、姫路さんも戦死してしまう。

「姫路さん、ここはいったん逃げるよ！」

「は、はい！」

僕らは教室に引き返した。

☆

僕らが教室に戻るとこわされたシャーペンや消しゴム、卓袱台があった。

「・・・うわ、これはひどい」
「卑怯、だね」
「いったい、誰がこんなことを・・・」

どうして、こんなことに。雄二や当麻は何をしていたんだ。

「協定の為に、教室を空けていたんだ。当麻もな。」
「協定？」
「ああ、四時までに決着がつかなかったら戦況をそのままにして続きは明日午前九時に持ち越し。その間は試召戦争に関わる一切の行為を禁止する。ってな」
「ふーん。どうして、当麻もいなかったの？」
「Ｂクラスの土御門が『カミやんも連れてくるにやー。そうすれば協定を結んでやるぜい』と言ってからしょうがなく連れて行ったんだ」
「そうなんだ・・・。それでその協定は結んだの？」
「そうだ、姫路や高町が万全じゃないと勝てないからな」

どうして、Ｂクラスはそんな協定を提案したのだろう？

「明久。前線に戻ってくれ。当麻と高町と一緒にな」
「わかった。行こう当麻、なのは」
「なのは、どうかしたのか？少し顔色悪いぞ」
「だ、大丈夫。心配しないで」
なのはのことが心配だが僕らは前線に向かっていった

☆

僕らが前線に戻るととても不利な戦況になってきた。半分以上が戦死していた。

「右側出入り口、教科が現国に変更されました！」

「誰か援護に来てくれ！」

「私が行くよ！」

そういい、高町さんが戦線に加わろうとした。しかし、

「あ・・・」

急に止まってしまった。いったいどうしたんだろう。目線の先には根本君がいた。根本君がどうかしたのだろうか？よく見ていると――

「っ！！」

「どうした？明久」

僕は見た。彼が持っている物を。

それは3日前に高町さんが書いていた手紙の封筒だった。

「・・・なるほど。そういうことか」

今、分かった。教室を荒らした犯人が。確かに高町さんか姫路さんが戦えないのならBクラスにとってはかなり有利になるはずだ。

「当麻。耳を貸して」

「ん？ああ」

ゴニョゴニョゴニョ

「分かった。そういうことか。なのは！」
「と、当麻くん・・・？」
「ここは俺と明久に任せて少し休んでろ」
「う、うん」
「じゃあ、行ってくるわ」
「さすがだね、当麻」
「なのはの様子がおかしいのはあいつのせいだからなだから、」
「「あの野郎は必ずぶち殺す」」

☆

「根本くん！」
「どうした観察処分者たち。お前らに用はないんだがな」
「好きに言ってろ」
「「試獣（サモン）召喚！！」」
「ちっ、試獣（サモン）召喚！」
『Ｆクラス　上条当麻　＆　吉井明久　ＶＳ　Ｂクラス　根本恭二
現国　５３７点　＆　８７点　ＶＳ　２４８点』
「なんだっ！？その点数は！？」
「さて、行くぞ明久。今回は俺の決め台詞を言わしてやる」
「うん、行くよ！当麻！」

「「根本！（根本君）！お前（君）が面白半分でなのはを苦しませるっていうならそのふざけた幻想をぶち殺す！」」

「くそ！」

『Ｆクラス　上条当麻　＆　吉井明久　ＶＳ　Ｂクラス　根本恭二
現国　５３７点　＆　８７点　ＶＳ　０点』

「これは返してもらうぞ」
「早く、補習室に行ってもらうよ」
「くっ」
「待つにゃー」
「土御門！？」
「こいつは俺が連れてくにゃー」
「どうして？」
「気にしなくていいぜい。それよりその封筒を早く高町に返してやるにゃー」
「すまんな。土御門。その前に一発殴らしてくれないか？」
「好きにすればいいぜい」
「お、おい！」
「くらえ、根本！（バキッ）」
「ぐはあっ」
「じゃあ、連れてくにゃー。またなカミやん」
「ああ」

そう言って、僕らはなのはのところに戻っていった。

☆

「はい、なのは」
「こ、これは・・」
「俺はよくわからんけどお前の大事なものだろ」
「あ、ありがとう。当麻君、アキ君」
「いやー、そう言われると照れるんでせうが。なぁ、明久」
「うん、そうだね」

そうこうしているうちに四時になってしまった。明日こそはBクラスを倒す！

――Aクラス――

戦争中、Aクラスでは

「・・・一方通行」
「どうしたァ。フェイト」
「今度機会あったら根本恭二。潰しておいて・・・」
「（ビクッ）ア、アア。分かったァ（スマンなァ。根本くン。これも俺の身のためだァ）」

という会話がAクラスにあったとかなかったとか。

第７問　ｖｓＢクラス？（後書き）

最後の話で分かったでしょうが根本君が今度、一方通行に殴られます。
今回は当麻に殴られて・・・。なのはの手紙に手を出すもんで。
次回はＢクラス戦後半です。お楽しみに！

第８問　ｖｓＢクラス？（前書き）

今回でＢクラス戦終結です。見てください！

第8問　ｖｓＢクラス？

翌日、復活したなのは、姫路さんと共に僕らはＢクラスの教室に攻め込んだ。

「いたいた、見つけたわよ！」

この声は・・・・。

「ゲッ、ビリビリ」

「ビリビリじゃないわよ！」

「当麻君・・・・。またなの・・・・？」

「落ち着け！なのは！誤解だぁっ！」

「こら！無視すんな！」

なんか知らないけど当麻が御坂さんを連れてどこかに行ってしまった。

当麻、君の犠牲は忘れない。

「よし、行くぞ。皆！」

『おおーっ！！』

――Ｂクラス――

「一気に行くよ！」

『Ｆクラス　高町なのは　＆　姫路瑞希　ＶＳ　Ｂクラス生徒×１０

化学　４３６点　＆４２９点　ＶＳ　１６９点×１０『

「ディヴァィィンバスターァァァッ！」
「はぁぁっ！」

姫路さんとなのはの二人のおかげでだいぶおせている気がする。

「いらっしゃい、なのはちゃん」
「はやてちゃん！」

『試獣召喚（サモン）！』

『Ｆクラス　高町なのは　＆　姫路瑞希　ＶＳ　Ｂクラス　八神はやて　＆　土御門元春
現国　１５３点　＆　４２１点　ＶＳ　４０１点　＆　２０５点』

「ええっ！？現国！？」
「なのはちゃんの弱点は知っとるからな～。準備しといたんや」
「そういうことだぜい、お前たちを倒せば俺たちの勝ちだからにゃー」

「さて、おいで！リインフォース！ユニゾンや」
『はい、主はやて。ユニゾンイン』
「いくよ～。響け！終焉の笛ラグナロク！」
「きゃあぁぁっ」

まずい。二人がやられたら勝てなくなる！

「明久。これを使え！」
「おっけーって、当麻！？」

「早く当麻をフィールドに入れろ！」
「わかった！（ホイ）」
『Ｆクラス　高町なのは　＆　姫路瑞希　＆　上条当麻　ＶＳ　Ｂクラス　八神はやて　＆　土御門元春
現国　１５３点　＆　４２１点　＆　５３７点
ＶＳ　３５１点　＆　２０５点』

「ええっ！不幸だぁぁぁっ！（パキーン）」

『えっ！？』
「（ここで来るとはさすがカミやんだにゃー、作戦が台無しだぜい）」
「今だ！なのは！姫路！」
『はい！』
「きゃ！」
「ちいっ」「不幸だぁ！」

『Ｆクラス　高町なのは　＆　姫路瑞希　＆　上条当麻　ＶＳ　Ｂクラス　八神はやて　＆　土御門元春
現国　１５３点　＆　４２１点　＆　１点ＶＳ　０点　＆　０点』
当麻、なのは、姫路さんによる攻撃でＢクラス戦は終結した。地味に当麻もくらってた気がするけどまぁいいか。

☆

「さて、それじゃ戦後対談といくか。な、八神」
「・・・せやね」

「本来なら設備を明け渡してもらい、お前らには素敵な卓袱台をプレゼントするところだが、特別に免除してやらないでもない」

雄二の発言に、ざわざわと周囲の皆が騒ぎ始める。

「落ち着け、皆。俺たちの目標はAクラスだ。ここがゴールじゃない」

「確かに」

「ここはあくまで通過点だ。だから条件を呑めば解放してやろうかと思う」

「条件はなんだにゃー」

「お前はわかってるだろう。根本を連れてきてくれ」

「わかったぜい。少し待つにゃー」

プルプルプル

「あ、フィアンマ先生？根本を連れ来てくれないかにゃー」

『わかった。待ってろ。すぐに行く』

「すぐ来るみたいだぜい」

ビュン

『早！』

まだ電話して1分もたってないよ！？

「これでいいのか？土御門」

「ありがとうだにゃー。先生」

「ふむ、それでは俺様は戻る。じゃあな」

先生の番号を知っているなんて土御門君は何者なんだろう？

「さて、根本」

「・・・なんだ」

「お前にはコレを着てAクラスに行って、試召戦争の準備ができていると宣言して来い。そうしたら今回は見逃そう」

「ば、馬鹿なことを言うな！この俺がそんなふざけたことを・・・・！」

根本君が慌てふためく。そりゃ嫌だよね。

『Bクラス全員っで必ず実行させよう！』

『任せて！必ずやらせるから！』

『せや、やったるで～』

『面白そうだにゃー』

Bクラスの仲間からの温かい声援。八神さんも土御門くんもちゃっかり混ざってる。

「んじゃ、決定だな」

「くっ！よ、寄るな！変態ぐふぅっ！」

「とりあえず黙らせました」

「お、おう。ありがとう」

さすがの雄二も変わり身の早さに驚いている。

「では、着付けに入るとするか。明久、任せたぞ」

「了解っ」

男子の制服と違い、全然やり方がわからない。

「吉井君、私がやったげるよ」
「八神さん、ありがとう」
そういい、八神さんは根本くんを連れて行った。
どんな感じになったのだろう？

～Aクラス～

「失礼する」
「えっと・・・誰？」
「根本だ、根本！」
「う、嘘！？」
「どうしたの、真実？」
「あ、優子。なんか変な人がやってきて」
「ふーん。その変態さんは何の用なの？」
「変態じゃない！。俺たちBクラスはAクラス戦に向け、戦争の準備をしている。と言いに来ただけだ。それじゃあ」

「待ちなァ、根本くン」
根本がAクラスの教室から帰ろうとしたとき前から最凶に呼び止められた。
「あ、一方通行（アクセラレータ）・・・」
「なンなンですかァ？その恰好はァ！」
「くっ！お前だって彼女の尻に敷かれてるじゃないか！」
「アアッ！？てめェは言っちゃいけねェことを言っちまったなァ！根ェェ本ォォくゥゥンよォォ！」

「ひっ！」

ダッ

「オラァ！逃げンなァ！」

「くっ！」

「悪ィが、こっから先は一方通行だァ！おとなしく尻尾まきつづらいて無様に元の居場所へ退きかえりやがれェ！（バキッ）」

「グハァッ」

『（かわいそうに・・・・まぁ、自業自得だけど）』

昨日、今日合わしてニ発の全力パンチ。根本ドンマイ。

☆

点数補給後の二日後の朝。僕らはAクラス戦の説明を受けていた。

「まずは皆に礼を言いたい。ここまで来れたのは、他でもない皆の協力があってのことだ。感謝している」

「ゆ、雄二、どうしたのさ。らしくないよ？」

「ああ。自分でもそう思う。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ」

そんなことを言われると、なんだかこっちまで胸が一杯になってくる。

「そしてAクラス戦だが、これは一騎討ちで決着をつけたいと考えている」

『どういうことだ？』

『誰と誰が一騎討ちをするんだ？』
『それで本当に勝てるのか？』
「落ち着いてくれ。それを今から説明する」
雄二がバンバン、と机を叩いて皆を静まらせる。
「やるのは当然、俺と翔子だ」
確かに代表同士の一騎討ちは当然だろう。けどAクラスはなぜ主席が代表じゃないのだろう？
それに姫路さんや高町さんも点数に差をつけられている。こう言っちゃ悪いけど――――
「馬鹿の雄二が勝てるわけなぁぁっ！？」
僕の頬をカッターがかすめる。殺す気か！？
「次は耳だ」
どうやら本気のようだ。
「まぁ、明久の言うとおり確かに翔子は強い。まともにやりあえば勝ち目はないかもしれない。だが、それでもDクラスやBクラスに勝てた」
試召戦争を勝利に導いてきた雄二の言葉だ。否定する人間はもうこのクラスにはいない。
「俺を信じて任せてくれ。過去に神童とまで言われた力を、見してやる」

『おおぉーーーっ！！』

「それでは、Ａクラスに向かおう」

☆

「一騎討ち？」

「ああ。Ｆクラスは試召戦争として、Ａクラス代表に一騎討ちを申し込む」

「うーん、何が狙いなの？」

「もちろんＦクラスの勝利が狙いだ」

「わかったわ、その代わり代表同士の一騎討ちじゃなくて七回勝負で四回勝った方の勝ち、でいいよね」

「いいだろう、勝負する内容はこちらが決めさせて貰う。」

「え？うーん・・・」

「・・・・受けてもいい」

「だ、代表！？」

いつの間に霧島さんが近くに来ていた。びっくりしたぁー！

「・・・・けど、条件がある」

「条件？」

「うん・・・・負けた方は何でも一つ言うことを聞く」

「じゃあ、こうしよう？勝負内容は七つの内四つそっちに決めさせてあげる。いいよね？」

「交渉成立だな」

「ゆ、雄二！何を勝手に！」

「心配するな」
「・・・・勝負はいつ？」
「そうだな。十時からでいいか？」
「・・・・わかった」
「よし。交渉は成立だ。一旦教室に戻るぞ」

交渉が終了し、Ａクラスを後にする。誰かの視線を感じていたけど気のせいかな？

第８問　ｖｓＢクラス？（後書き）

どうだったでしょうか？
次回からＡクラス戦に突入です。そしてオリキャラが出てきます！

第9問　ｖｓＡクラス？　ムッツリーニの本気

「では、両名とも準備はいいですか？」

立会人はここ数日の戦争でお世話になっている、Ａクラス担任かつ学年主任の高橋先生だ。なぜかその周りには生活指導担当のヴェント先生、テッラ先生、アックア先生、フィアンマ先生がいる。なんかやりづらいよ・・・・。

「ああ」

「・・・・・問題ない」

一騎討ちの会場はＡクラス。

「それでは一人目の方、どうぞ」

「アタシから行くよっ」

向こうは秀吉のお姉さんの木下優子さん。

対するこちらは

「ワシがやろう」

その弟の木下秀吉だ。

「秀吉が相手なの？」

「そうなのじゃ」

「まぁ、いいや試獣召喚！」

「試獣召喚」

『Ａクラス　木下優子　ＶＳ　Ｆクラス　木下秀吉
英語　３５２点　＆　８５点』

あまりにも差がありすぎる。おそらく秀吉は勝てないだろう。

「はあぁぁっ」
「くうっ」

『Ａクラス　木下優子　ＶＳ　Ｆクラス　木下秀吉
英語　３５２点　＆　０点』

「すまぬの」
「大丈夫だ、まだなんとかなる」

秀吉が負けて０勝１敗になった。

「では、次の方どうぞ」
「僕が出よう。科目は物理で」

Ａクラスからは久保利光君。Ｆクラスからは、

「よし。頼んだぞ、明久」
「え！？僕！？」

どうしよう！相手は学年三席の久保君だよ・・・。

「大丈夫だ。俺はお前を信じている」

自信たっぷりの雄二の言葉。
そうか、雄二のヤツ。

「やれやれ、僕に本気を出せってこと？」
「ああ。お前の本気を見してやれ」
「そうだぜ、明久。がんばれ！」
『おい、吉井って実は凄いヤツなのか？』
『いや、そんな話は聞いたことないが』
『いつものジョークだろ？』

味方であるはずのＦクラスの言葉。
ま、仕方ないか。今までの僕を見ていたら普通そう思うよね。でも、

「吉井君、君の本気を見してくれ」

対戦相手の久保君が期待を込めた目で言ってくる。

「任せてよ。今まで隠してきたけれど、実は僕――――左利きなんだ」

『Ａクラス　久保利光　ＶＳ　Ｆクラス　吉井明久
物理　４１１点　ＶＳ　６２点』

おかしい。本気を出したのに負けるなんて。

「このバカ！テストの点数に利き腕は関係ないでしょうが！」
「し、島田さん！フィードバックで痛んでいるのに、更に殴るのは勘弁して！」

やっぱり６倍以上の点数を相手に慣れだけで勝てるわけないよね。

「よし。勝負はここからだ」

「ああ、そうだな」
「ちょっと待った雄二！当麻！アンタら僕を全然信頼してなかったでしょう！」
「信頼？何ソレ？食えんの？」
「お前にはがっかりだよ」

本気を出した左腕で殴りたい。それに当麻にだけはそんなこと言われたくない。

「では、三人目の方どうぞ」
「・・・・・・（スクッ）」
「じゃ、ボクが行こうかな」

こちらからはムッツリーニ。Ａクラスからは色の薄い髪をショートカットにした、ボーイッシュな女の子が出て来た。誰だろう？あまり見たことないけど。

「一年の終わりに転入してきた工藤愛子です。よろしくね」
「科目は何にしますか？」
「・・・・・・保健体育」

ムッツリーニの唯一にして最強の武器が選択される。

「土屋君だっけ？随分と保健体育が得意みたいだね？」

ムッツリーニの実力を知らないのかな？随分と余裕みたいだけど。

「でも、ボクだってかなり得意なんだよ？・・・・キミとは違って実技で、ね♪」

な、なんだかとっても問題発言！？

「そっちのキミたち、吉井君とツンツン頭の人。勉強苦手そうだし、保健体育で良かったらボクが教えてあげようか？もちろん実技で」

「「フッ。望むところ―――（ブルッ）」」

なんだろう、いきなり寒気が。

「当麻君には私が教えてあげるからいいの！」

なのは。その発言は当麻の寿命を縮めることにつながるよ。

『上条を潰せー！』

「どうして上条さんが。不幸だぁぁっ！一方通行！助けてくれ！」

「フン、前にフェイトに陰口した恨みをうけてやがれェ」

「ケンカはそこまでにするのである」

『どうしてですか！先生！』

「どうしてもやりたいというのなら私がやってもいいのだが？（ガシャン）」

アックア先生がアスカロンを出した。あれにはいい思い出が無い・・・。

『いえ、結構です』

即答！？けど、しょうがないよね。

「そろそろ召喚を開始して下さい」

「はーい。試獣召喚っと」
「・・・・・試獣召喚」
二人が召喚獣を呼ぶ。
「なんだあの巨大な斧は！？」
見るからに破壊力抜群の巨大な斧。オマケに例の腕輪までしている。
ヤバい！コイツはかなり強いぞ！
「実践派と理論派、どっちが強いか見せてあげるよ。それじゃ、バイバイ。ムッツリーニくん」
「ムッツリーニっ」
「・・・・・加速」
ムッツリーニの腕輪が輝き、彼の召喚獣の姿がブレた。
「・・・え？」
相手の戸惑う顔。僕にも状況がよくわからない。どうしてムッツリーニの召喚獣は相手の射程外にいるうだろう？
「・・・・・加速、終了」
『Ａクラス　工藤愛子　ＶＳ　Ｆクラス　土屋康太
保健体育　４４６点　ＶＳ　５７２点』
さ、さすが、ムッツリーニ！
「そ、そんな・・・・・！この、ボクが・・・・！」

工藤さんが相当ショックを受けている。
「これで二対一ですね。次の方は？」
「あ、は、はいっ。私ですっ」
こちらからは姫路さんが出る。恐らく彼女なら久保君より強くなければ負けないだろう。
「こっちからは私が出まーす」
Aクラスからは――――あれどっかで見たことのあるような？
「今年から転入した御堂真実です。久しぶりだね、明久。瑞希」
嘘っ！？これがあの真実！？昔と全然違うじゃん！
「それと明久？浮気は許さないよ？（ジロッ）」
う、浮気！？なんで僕睨まれてるの！？
「昔、助けてくれたとき言ったじゃん（僕が一生真実を守るよ）って」
「・・・・吉井君？それは本当ですか・・・？」
なんか姫路さんが怖いんだけどっ！
「瑞希？明久は私のものだよ。もう明久の家族の許可とってるもん」
「そんなの関係ありませんっ！」
「じゃあさ、試合で負けたほうがあきらめるってことでいいね！」

「わかりました。恨みっこは無しですよ」
「もちろん」
なぜか僕の運命のかかった第４試合が始まった。
どうしてこうなった・・・・。

第9問　ｖｓＡクラス？　ムッツリーニの本気（後書き）

真実「はじめまして～。御堂真実で～す」

はじめまして真実さん。

真実「そういえば、どうして明久は私のことを覚えてないの？」

ああ、その話はいつか余裕があったらやるから大丈夫だよ。

真実「ふーん。次回は私の勝負だよ！皆見てね！バイバ～イ」

真実を皆様の話で出してくださると嬉しいです。それではまた！

第１０問　ｖｓＡクラス？　僕の昔の幼馴染となのはの全力全開（前書き）

タイトルでわかる通り今回は真実となのはの試合です。

真実「私の腕輪が発動するよ～」

なのは「当麻君のためにも勝たなくちゃ」

第１０問　ｖｓＡクラス？　僕の昔の幼馴染となのはの全力全開

真実と姫路さん、いったいどっちが強いんだろう？

「ここはもらったな（ニヤッ）」

雄二は姫路さんの勝ちだと思ってるけどなんか大事なことを忘れているような。

「総合科目でお願いします」

科目はどうやら真実が選択したようだ。

『Ａクラス　御堂真実　ＶＳ　Ｆクラス　姫路瑞希
総合科目　３８７９点　ＶＳ　４４０９点』

真実の召喚獣は２ｍを超える剣一本で服装はＴシャツにジーンズと身軽そうだ。

『マ、マジか！？』
『いつの間にこんな実力を！？』
『この点数、霧島翔子に匹敵するぞ・・・・！』

至るところから驚きの声があがる。

「すごいね～瑞希。どうやってそんなに強くなったの？」
「・・・私、このクラスの皆が好きなんです。人の為に一生懸命になれる、Ｆクラスが」
「Ｆクラスが好き？」

「はい。だから、頑張れるんです。いきます！」
姫路さんが相手に手を向ける。あれはＢクラス二人を一撃で倒した腕輪の能力
ズゴォォン
真実の召喚獣に向かって熱線が飛んでいく。
「甘いよ瑞希！解放（リベレイション）！」
真実がそう叫ぶと、召喚獣が輝き、目で見えないスピードで熱線を避けた。
「やぁ！（ズバッ）」
「えっ！？」
『Ａクラス　御堂真実　ＶＳ　Ｆクラス　姫路瑞希
総合科目　３６７９点　ＶＳ　３９０２点』
真実の召喚獣の剣による一撃で一気に姫路さんの点数が削られた。
「どうしてこんなにダメージを受けるんですか！？」
「私の召喚獣の腕輪の効果は≪解放（リベレイション）≫で、消費する点数に応じて召喚獣のあらゆるパラメータを上昇させる能力だよ」
「けど負けませんっ！」
「私もだよ♪」
キィィン　ヒュン　ズバァッ

二人の召喚獣がぶつかり合い、互いの点数を減らしいく。

『Ａクラス　御堂真実　ＶＳ　Ｆクラス　姫路瑞希
総合科目　１０２６点　ＶＳ　１５７４点』

「終わりにしますっ！はぁぁっ！」
「ごめんね瑞希。私の勝ちだよ【唯閃】！！」

真実が剣を鞘に戻したかと思うと、召喚獣が見えなくなるほどの光が放たれた。

ズバァァァン

召喚獣が見えるようになると、姫路さんの召喚獣が真っ二つに斬られていた。

『Ａクラス　御堂真実　ＶＳ　Ｆクラス　姫路瑞希
総合科目　２６点　ＶＳ　０点』

「そんな。まさか姫路が負けるなんて」

雄二が悔しそうな顔をしていて、Ｆクラス全体の士気が下がっているように感じた。

「瑞希。それじゃ明久は私がもらってくね」
「・・・・はい」

姫路さんがすごく落ち込んでいる。って、

「ちょっと待って真実！僕の人権は！？」

「・・・わかったわ。この試合でＡクラスが負けたら今回は見逃してあげる」

くっ、残りの三試合は絶対に勝たないと・・・。

「では、次の方どうぞ」

「あ、はい。私です」

「なのは！がんばれよ！」

「うん！」

「Ａクラスからは私が行くよ」

「頼むぞォ、フェイト」

第五試合はなのはＶＳハラオウンさんみたいだ。

「勝負だね、なのは」

「負けないよ！フェイトちゃん！」

「「セーットアーップ！！」」

『Ａクラス　フェイト・Ｔ・ハラオウン　ＶＳ　Ｆクラス　高町なのは

数学　４２３点　ＶＳ　４２５点』

なのはの召喚獣は白と青を基調としたドレス風の服で手には真ん中に赤い宝石がついた杖を握っている。

一方、ハラオウンさんの方は、なのはの服を黒くした感じで背中に白いマントを羽織っており、黒色の斧を持っている。

同時に二人の召喚獣が駆け出し、勝負が始まった。

”Ｐｌａｓｍａ　Ｌａｎｃｅｒ”
”Ａｘｅｌ　Ｓｈｏｏｔｅｒ”
なのはとフェイトが同時に桃色と金色の魔力弾を作り出した。
「ファイア！」
「シュート！」
互いの叫び声と同時に、魔力弾が標的に向かって飛んでいく。
二人とも当たることなくそれを避けていく。すごいなぁ。
「やるね、なのは」
「フェイトちゃんこそ！」
そういい、二人は再びぶつかっていく。
『Ａクラス　フェイト・Ｔ・ハラオウン　ＶＳ　Ｆクラス　高町なのは
数学　３４２点　ＶＳ　３４２点』
「いくよ、バルディッシュ」
”Ｙｅｒ　ｓｉｒ”
ハラオウンさんの掛け声と同時に足元に巨大な魔法陣が出来る。
周囲では魔方陣が出来たり、消えたりしていた。
「Ｐｈａｌａｎｘ　Ｓｈｉｆｔ」
その後、ハラオウンさんの周りには無数の魔力弾が出現し、

なのはを見つめて、
「フォトンランサー・ファランクスシフト」
技名を言い、
「撃ち砕け、ファイア！！」
その言葉と共に、すべての魔力弾がなのはに向かって飛んでいった。
最後にハラオウンさんは、巨大な雷の槍を作り出し、
「スパークエンド」
雷の槍がなのはの近くぶつかるのと同時に激しい爆発が起きた。
「なのは！」
隣にいた当麻が叫ぶ。僕も心配だ。
しばらくして、
「にゃはは、大丈夫だよ当麻君」
『Ａクラス　フェイト・Ｔ・ハラオウン　ＶＳ　Ｆクラス　高町なのは
数学　３４２点　ＶＳ　２７３点』
なのはは点数を消費していたが、まだ負けていなかった。
「今度はこっちの番だよ、フェイトちゃん！」
”Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ”

なのはの得意技がハラオウンさんに向かう。
ハラオウンさんはとっさに障壁を作りそれを防ぐ。
「おしいな、もう少しだったのに」
「まだだよ！」
なのはの掛け声と同時に腕輪が輝きだす。
「受けてみて！これが私の全力全開っ！スターライトブレイカーぁぁぁっ！！！！」
”Ｓｔａｒｌｉｇｈｔ　Ｂｒｅａｋｅｒ”
桃色の閃光がハラオウンさんの召喚獣を包み込む。
「きゃあぁぁっ！」
『Ａクラス　フェイト・Ｔ・ハラオウン　ＶＳ　Ｆクラス　高町なのは
数学　０点　ＶＳ　２３点』
なのはの一撃で勝敗が決した。
「お疲れ、なのは」
「にゃはは、ありがとう」
Ａクラス３勝ＶＳＦクラス２勝

第１０問　ｖｓＡクラス？　僕の昔の幼馴染となのはの全力全開（後書き）

真実「私の実力どうだったかな？」

すごいですよ。

真実「まぁ、そりゃアメリカに行ってたもん」

ハハハ、ですよねー。

真実「さて、次回は最強対最弱と代表同士の勝負で～す」

第１１問　ｖｓＡクラス？　最強（さいじゃく）対最弱（さいきょう）（前書き

Ａクラス戦終了まであとわずかです。

真実「見てくださーい」

第１１問　ｖｓＡクラス？　最強（さいじゃく）対最弱（さいきょう）

なのはの勝利でまだ首の皮一枚はつながっている。

「次の方、どうぞ」

「俺が出るぜェ」

向こうからは一方通行（アクセラレータ）君がでるみたいだ。

「まずいな、あいつに勝てるやつはこの学園に５人はいるかわからないって土御門が言っていた」

「じゃあ、どうするのさ！？この勝負に負けたら戦争にも負けちゃうよ！」

「ああ、だから今悩んでいる。ｓ「俺が出るしかないだろう」当麻？」

「ダメだよ当麻君！学年主席と戦ったらフィードバックでボロボロになっちゃうよ！」

「心配するなよ、なのは（ナデナデ）」

「ふぇっ！？／／／」

「じゃあ、行ってくる。任せとけ」

当麻、ほんとに大丈夫かな。なのははショートしちゃってるし。なにより僕の人生がかかってるんだから！

「まさかァ、オマエとなンてなァ、当麻ァ」

「しょうがないだろ。学年主席（さいきょう）」

「確かにオマエ以外じゃこの学年に俺に勝てるやつはいねェからなァ」

「この学年ってことは他の学年には勝てるやつがいるのか？」
雄二が一方通行（アクセラレータ）君に質問する。
「アア。今ンとこ、三年Ａクラス代表の垣根と当麻が俺に勝つ可能性があるみてェだ」
「マジかよ。どうしてだ？」
「オマエに教える義理があンのかァ、元神童ゥ」
「チッ」
雄二が口勝負で負けるなんてさすが二大不良の一人だ。
「さて、試合を始めてください」
「いくぜェ！最弱（さいきょう）！」
「望むところだ！最強（さいじゃく）！」
『Ａクラス　一方通行（アクセラレータ）　ＶＳ　Ｆクラス　上条当麻
現国　６３７点　ＶＳ　５８３点』
二人ともなんて点数だ。一方通行（アクセラレータ）君は真っ黒に少し赤が混じった腕輪をつけている。
ていうか、あんな腕輪あったっけ？
『なんだ！？あの腕輪の色は！？』
『見たことないぞ！』
「・・・・！？」
高橋先生を含む、ほとんどの人が驚いている。

「ようやく始まるな」
「うむ、我々の目的は二人の勝負を拝見することであるからな」
「どっちが勝つと思います～？」
「アレイスターが言うにはまだ幻想殺しが有利らしいよ」
「確かに奴には［？？？］が　宿っているからな」

先生たちが奥で話してるけどどうしたんだろう？

「今回は時間を気にしなくていいからなァ、腕輪の力がフルで使えるぜェ」

一方通行君が腕輪を使った真実よりも早く移動し、当麻に迫る。

「うぐっ！」

当麻が左腕を押さえてふらつく。腕の色が少し変色している。

「まだ終わらねェぞォ！」

一方通行君が手をかざすと、風が集まり当麻に向かって飛ばした。

「くっ！（バッ）」

キュィィィン

当麻が右手をぶつけると風の塊が分散した。

『Ａクラス　一方通行　ＶＳ　Ｆクラス　上条当麻
現国　６３７点　ＶＳ　４６９点』

だいぶ点数に差がついている。まずいぞ。

「俺の腕輪の真の力を見してやるぜェ」

おオオオオオオオッッッッ！！！！

一方通行（アクセラレータ）君が叫ぶと召喚獣の背中から黒い翼がでてきた。なんだ！？あれは！？

「くたばれェ！当麻ァ！」

ズバァァ　ビチャ

一方通行（アクセラレータ）君が翼を振りかざしたと同時に、当麻の召喚獣の右腕が切り裂かれた。

『きゃあぁぁっ！！！』

「当麻君・・・嘘」

女子は叫び声をあげ、なのはは顔を真っ青にした。

『Ａクラス　一方通行（アクセラレータ）　ＶＳ　Ｆクラス　上条当麻
現国　６３７点　ＶＳ　１点』

「チッ、少しずれたかァ」

「・・・・（ユラリ）」

「まだ立てたのかァ。さっさとくたばりやがれェ！」

一方通行（アクセラレータ）君の翼の攻撃が当たったと思ったら、いきなりフィールド

内が見えなくなった。
「なンなンだよォ！その右腕から出ている竜はァ！」
竜？いったいどうしたんだろう？当麻は負けちゃったのかな？
『Ａクラス　一方通行（アクセラレータ）　ＶＳ　Ｆクラス　上条当麻
現国　０点　ＶＳ　１点』
フィールド内が見えたと思ったら当麻の召喚獣しか立ってなかった。
「さて、保健室に連れて行くか」
「任せたのである」
「ああ（ヒュン）」
釈然としない６回戦が終わり、３対３となった。

☆

「最後の一人どうぞ」
「・・・・・はい」
Ａクラスからは代表の霧島翔子さん。ウチのクラスからは当然、
「俺の出番だな」
坂本雄二。コイツしかいない。
「教科はどうしますか？」
「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は百点満点の上限ありだ！」

ざわ・・・・・！

雄二の宣言でＡクラスにざわめきが生まれる。

『上限ありだって？』

『しかも小学生レベル。満点確実じゃないか』

『注意力と集中力の勝負になるぞ・・・』

「わかりました。そうなると問題を用意しなくてはいけませんね。少し待っていてください」

高橋先生が問題を準備するために教室から出て行く。

「雄二、あとは任せたよ」

「ああ。任された」

「・・・・（ビッ）」

「お前の力には随分助けられた。感謝している」

「・・・・（フッ）」

「高町はどこ行った？あいつにも感謝したいんだが？」

「なのはなら保健室に行ったよ」

「そうか」

「では、最後の勝負、日本史を行います。参加者の霧島さんと坂本君は視聴覚室に向かって下さい」

「・・・・はい」

「じゃ、行ってくるか」

「行ってらっしゃい」

「ああ」

「皆さんはここでモニターを見ていて下さい」

壁のディスプレイに視聴覚室の様子が映し出された。

『では、問題を配ります。制限時間は五十分。満点は１００点です。不正行為等は即失格です。いいですね？』
『・・・・はい』
『わかってるさ』
『では、初めてください』

「吉井君、いよいよですね・・・！」
「そうだね。いよいよだね」
「これであの問題がなかったら坂本君は・・・！」
「集中力や注意力に劣る以上、延長戦で負けるだろうね。でも」
「はい。もし出ていたら」
「うん」

もし出ていたら、僕らの勝ちだ。

誰もが固唾を飲んで見守る中、ディスプレイに問題が映し出される。

《次の（　）に正しい年号もしくは日付を記入しなさい》

（　　）年　平城京に遷都
（　　）年　平安京に遷都

流石は小学生問題。僕でもわかりそうだ。

（　　）年　闇の書事件
（　　）年　Ｐ・Ｔ事件
（　　）月（　　）日　街外れの操車場で粉塵爆発発生
（　　）月（　　）日　第三次世界大戦開戦

これは本当に日本史なの！？

（　　）年　鎌倉幕府成立
（　　）年　大化の改新

「あ・・・・！」
「よ、吉井君っ」
「うん！」
「これで私たちっ・・・・！」
「うん！これで僕らの卓袱台が」

『システムデスクに！』

《日本史勝負　限定テスト　１００点満点》

『Ａクラス　霧島翔子　ＶＳ　Ｆクラス　坂本雄二
日本史　９７点　ＶＳ　５３点』

Ｆクラスの卓袱台がみかん箱になった。

第１１問　ｖｓＡクラス？　最強（さいじゃく）対最弱（さいきょう）（後書き）

真実「上条君も一方通行君もすごかったね～」

そうだね、黒い翼が出たり、［？？？］が出たりしたからね。

真実「あれはなんなの？」

さぁ、あれの正体を知っているのはアレイスター理事長だけだと思うよ。

真実「気になる～！それにしても坂本君は・・・けど明久は私のものになったからうれしいよ」

明久をいじめないであげてよ！

真実「うう～。なるべく気をつけるわ」

頼むよ！

第１２問　試召戦争終了と新たな出会い！？（前書き）

今回の話で第一章は終了します。当麻が聖王と出会ったり、明久と雄二の運命が決まっていきます。

真実「見てくださ～い！」

第１２問　試召戦争終了と新たな出会い！？

「四対三でＡクラスの勝利です」

視聴覚室になだれこんだ僕らに対する高橋先生の締めの台詞

「・・・・雄二、私の勝ち」

「・・・・殺せ」

「良い覚悟だ、殺してやる！僕の人生まで巻き込みやがって！」

「吉井君、落ち着いてください！」

「だいたい、５３点ってなんだよ！０点なら名前の書き忘れとかも考えられるのに、この点数だと――――」

「いかにも俺の全力だ」

「この阿呆がぁーっ！」

「待てって、明久」

「当麻、どうしてさ？あんなに痛い思いでギリギリ勝利したのに！」

「だけど、上条さん的にいいことがあったからいいんですよ／／」

「・・・・・／／／」

なんか当麻となのはの顔が赤いけど何があったんだ！？

「ねぇ、なのは？何があったの？」

「そ、それは「高町が当麻に抱きついたンだァ」ちょっと一方通行（アクセラレータ）君！？」

良かったね、当麻。君が勝負に負けてたらすぐに斬りかかるとこだったよ。

「・・・・雄二。約束」

「わかっている。何でも言え」
「・・・・雄二、私と付き合って」
・・・・・・はい？
「やっぱりな。お前、まだ諦めてなかったのか」
「・・・・私は諦めない。ずっと、雄二のことが好き」
「その話は何度も断っただろ？他の男と付き合う気はないのか？」
「・・・・・私には雄二しかいない。他のひとなんて、興味ない」
「拒否権は？」
「・・・ない。約束だから。今からデートに行く」
「ぐぁっ！放せ！やっぱこの約束はなかったことに――――」
ぐぃっ　つかつかつか
霧島さんは雄二を連れて、教室を出て行った。
『・・・・・・・』
『・・・・・・・』
『・・・・・・・』
「さて、Fクラスの皆。お遊びの時間は終わりだ」
こ、この声は！？
「あれ？西村先生。僕らに何か用ですか？」
「ああ。お前らは戦争に負けたから担任が俺になり、副担任に神の右席がつく」
『なにぃっ！？』

Fクラスから悲鳴があがる。

「そして、吉井、上条。お前らと坂本は話し合いの末、吉井には御堂。上条には高町。坂本には霧島がつき、面倒を見てもらうことになった」

「・・・そ、そんな」

「とりあえず明日から授業とは別に補習の時間を二時間設けてやろう」

僕は少しだけ、やる気を出していた。3ヶ月後にまた試召戦争を起こして、この教師から逃れる為に。

「よし、じゃあ。明久。デートに行くわよ」

「ええっ！？そんな僕にはお金なんてん無いよ！」

「大丈夫よ、玲さんからアメリカから来る前に明久の生活費を預かってきたから」

「ど、どうして！？」

「これからは私が明久の面倒みるからね♪それじゃ、行くわよ」

「・・・・・はい」

あれなんかすごい既視感（デジャブ）。

☆

「当麻君！一緒に帰ろ！」

「あ、ああ」

「どうしたの？」

「い、いや。何でもない」

あんなことされちゃ、さすがの上条さんでも恥ずかしいでせうよ。
「フェイトちゃんも行くよ。ほら早く！」
「わ、わかったよ～。なのは」

～帰り道～

「当麻君、これから暇？」
「一応何もなかったはずだが」
「じゃあ、帰りに私の家寄ってってよ。フェイトちゃんもどう？」
「わかったぜ」
「うん」
ちなみに一方通行（アクセラレータ）は「クソガキが待ってるから先帰る」と言って帰っていった。

～翠屋～

「ただいま～」
「「おじゃましまーす」」
「おかえり！なのはお姉ちゃん！」
「ただいま、ヴィヴィオ」
「あ、フェイトお姉ちゃん！それと、隣の人は誰？」
「こんにちは、ヴィヴィオ」
「上条当麻だ、よろしく。え～っと、なのは？この子は？」
「ああ、この子は私の家で預かっている養子の一人だよ」

「一人？他にも誰かいるのか？」
「うん。ヴィヴィオ。アインハルトは？」
「アインハルトお姉ちゃんなら道場に行ってるよ」
「ちなみに私の家でも二人預かってるよ」

すごいな、なのはとフェイトは。

「ヴィヴィオはこの人のことを当麻お義兄ちゃんって呼べばいいんだよね？なのはお姉ちゃん」
「そうだよ」
「ちょっと待て！どうしてそうなる！？」
「ダメなの？当麻お兄ちゃん（ウルウル）」
「うっ・・・。好きにしてください・・・」

女の子の涙目での上目遣いには勝てない。

「ゲッ、特売セールスの時間だ！じゃあな！俺急がないと！」
「う、うん。またね」
「バイバ~イ。当麻お兄ちゃん！また来てね！」
「ああ、約束する。またな！」

こうして俺はなのはの家から急いでスーパーに向かって行った。

第１２問　試召戦争終了と新たな出会い！？（後書き）

ヴィヴィオは当麻のことを気にいったみたいです。
これでまたなのはの家に来るフラグが建ちました。
これからヒロインたちのアプローチが過激になっていくかも！？
ほどほどにしてあげてね！

真実「わかってるよ～、心配しないで」
なのは「にゃはは、少しは今回のことで当麻君が意識してくれて嬉しいよ／／」

では、第二章もお楽しみに！

キャラ設定　Ｐａｒｔ２

御堂真実（おどうまみ）

明久の幼馴染。明久と付き合うのに両家の許可を持っている。身長は明久とほとんど一緒で、胸はＥカップ。容姿はモデル並み。性格はゆるい雰囲気が大好きで温厚だが、明久のことになると見境がなくなる。ある道場に通っている（アックアやヴィヴィオと同じ）。ある出来事がきっかけでアメリカに行き１０年間生活していた。その時に明久に惚れる。
得意教科は英語（約６００点）、数学（約５００点）、世界史（約４５０点）。Ａクラス内でも成績上位にいる。
趣味は料理、武道。

☆召喚獣

容姿：上半身はＴシャツでジーンズをはいている（禁書の神裂みたいな感じ）
武器は２ｍを超える日本刀のみ（これも神裂の「七天七刀」がモデル）
鎧を纏ってないので動きは早いが、反面防御が薄い。
腕輪の能力：能力解放（リベレイション）
消費する点数に応じて攻撃力、防御力、素早さなどの召喚獣のパラメーターが上昇する。（１００点で約２倍。１０００点で約１０倍になる）技としては、「唯閃」や「紫電一閃」などがある。

土御門元春

容姿など基本的には原作通り。
Ｂクラスの参謀的存在。
天邪鬼な性格。上条の親友で一年の時はデルタフォースと呼ばれていた。Ｂクラス内ではよくはやてとつるんでいる。あと理事長のプランを知っている。独自の情報網を持っている。

得意科目は物理、地学。（両方とも約３００点ぐらい）

☆召喚獣

容姿：学生服の下にアロハシャツを着ている。武器は拳銃を持っている。装備が薄いので動きは早い。

腕輪の能力：陰陽術

「赤ノ式」や「黒ノ式」、「理派四陣」などの術式を発動させる。

この腕輪は４００点に届いていなくても使用できるが、その場合２発使用すると残りの点数が１になる。
４００点以上の場合は一発使用するのに１００点消費する。

高町ヴィヴィオ

高町家に養子としている。格闘技を習っている。１０歳で葉月、エリオ、キャロ、ルーテシアと親友。なのはやアインハルトとは義姉妹。（イメージとしては原作のＶｉｖｉｄ）

高町アインハルト

高町家に養子としている。ヴィヴィオと同じく格闘技を習っている。１３歳。なのはとヴィヴィオとは義姉妹。（イメージは原作のＶｉｖｉｄ）

エリオ・Ｔ・ハラオウン

ハラオウン家に養子としている。当麻と一方通行に憧れをもっている。１０歳。（イメージはＳｔｒｉｋｅｒｓ）

キャロ・Ｔ・ハラオウン

ハラオウン家に養子としている。エリオに好意をもっている。１０歳。（イメージはＳｔｒｉｋｅｒｓ）

ルーテシア・アルピーノ

当麻と面識あり？　エリオやキャロの幼馴染。１０歳（イメージはＳｔｒｉｋｅｒｓ）

垣根帝督

性格は普段おちゃらけてるが、気にいらないことがあると容赦がない。文月学園３年Ａクラス代表でありカリスマ性がある。一方通行に勝つことのできる人物の一人。当麻や一方通行とは昔からの知り合い。

平均得点は約５５００点ぐらい。万能で苦手科目はない。（イメー

ジは原作通り）

☆召喚獣

容姿：原作通りの格好（ホスト風にスーツを着ている）ほとんど使わないが拳銃を携帯している。
攻守などは低いが能力を発動するのであまり意味なし。

腕輪の能力：未元物質（ダークマター）

３００点消費することで白い翼を出現させる。攻守のどちらにも使える。能力トップクラスの腕輪。
発動したら自分の意思で解除するまで消えない。

ヴェント

神の右席の一人。召喚獣の仕様は原作通り。担当教科は文系全て。

腕輪の能力：天罰術式

効果は自分を対象にした召喚獣とその召喚者のリンクを切り離す（一回につき、５０点消費する）

テッラ

神の右席の一人。召喚獣の仕様は原作通り。担当教科は理系全て。

腕輪の能力：光の処刑

自分の点数の半分以下の点数の召喚獣の攻撃を無効にする。ただし複数の相手には効果なし（1度使用するごとに無効にした召喚獣の点数の半分の点数を消費する）

アックア

神の右席の一人。召喚獣の仕様は原作通り（アスカロンとメイス装備）。ある道場に通っている。召喚獣は特別仕様。担当教科は保健体育だが、戦争では基礎の教科は承認できる。性格は至って真面目。

召喚獣の特殊能力：聖母崇拝

腕輪を使用する際に、消費する点数を半分にすることができる。1度の戦争で2回まで。

腕輪の能力：聖痕（ステイグマ）解放

真実の腕輪の上位版。召喚獣の能力のパラメーターを上昇させる。発動後、3分過ぎると上昇させた分に応じて点数を消費する。300点消費することで水の竜を作り出す（これは1つの例であって他にも別のパターンも存在する）

フィアンマ

神の右席の一人で副リーダー。召喚獣の仕様は原作通り。全ての教

科を承認できる。性格はかなり自分勝手。召喚獣は特別仕様。

召喚獣の特殊能力：聖なる右

相手の点数によって自分の点数も増減する。１度の戦争で使用制限は５回まで。

腕輪の能力：竜王の殺息（ドラゴンブレス）

次元の裂け目から光線を放つ。砲撃系の腕輪で最強の破壊力。１発に４００点消費する。

アレイスター＝クロウリー

文月学園の理事長。当麻や明久の召喚獣に細工を施したり、一方通行や垣根帝督に腕輪を与えた人物。

当麻の召喚獣の秘密を知っている数少ない人物の一人。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

～～～～～～～～～～～～～～

神の右席

前方のヴェント・左方のテッラ・後方のアックア・右方のフィアンマ・中央の鉄人からなる生活指導担当の集団。ＦクラスがＡクラスに負けたことによりＦクラスの担当にもなる。

召喚獣の特別仕様

当麻は謎の解明のため、フィアンマ・アックアはその暴走を止めるためにアレイスターが施した召喚獣本体がもつ能力。フィードバックなどと同じ。ちなみに明久の召喚獣も改造されている。

謎の腕輪

一方通行と垣根帝督がもつ特殊な腕輪。一方通行のは漆黒の腕輪。垣根のは純白の腕輪と呼ばれている。
名目上特別研究者とのハンデを減らすために作られた。

特別研究者

当麻、明久のように召喚獣自体に特別な力がある人物のこと

キャラ設定　Part2（後書き）

以上が一章で出てきたり今後出てくる可能性のある人たちです。抜けている人がいたら教えてください！

第１３問　Ｆクラスの出し物決めと学園の思惑？（前書き）

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力ください
『あなたが今欲しいものはなんですか？』

姫路瑞希の答え
『クラスメイトとの思いで』

教師のコメント
なるほど。がんばっていい思い出を作ってください。

吉井明久の答え
『平穏』

教師のコメント
あきらめてください

高町なのはの答え
『当麻君との思いで』

教師のコメント
先生は高町さんの恋を応援しています

第１３問　Ｆクラスの出し物決めと学園の思惑？

今、文月学園では『清涼祭』の準備が始まりつつあった。そして各ＨＲは準備で活気が溢れている。そして、我らがＦクラスはというと――――

「さて、そろそろ『清涼祭』の出し物を決めたいと思う」

学園祭の出し物を決めていた。なぜ真面目に決めているかというと、朝の登校時に真実から「真面目に行事に取り組まないと玲さんに報告するわよ」と言われたからだ。雄二も霧島さんに似たようなことを言われたらしい。

「とりあえず、議事進行並びに実行委員として誰かを任命する。そいつに全権を委ねるので、後は任せた」

心の底からどうでもよさそうな態度の雄二。後で霧島さんに言ってやろうか。

「なのはがやってみたらどうだ？おまえの家、喫茶店だし」

「そうだね、やってみようかな」

「じゃあ、高町でいいか？」

「うん。なら副実行委員は私が決めていい？」

「ああ。んじゃ、あとは任せたぞ。ふぁ～・・・」

そんなやりとりで実行委員はなのは、副実行委員は当麻に決まった。

「それじゃ、決めちゃうね～。みんな何がいい？」

なのはがそう言うと数名が手を挙げた。

「はい、土屋君」
「・・・・写真館」
「・・・えっと～。写真館って何を貼るの？」
「・・・・計り知れない人の神秘」
「ねぇ、当麻君。Ｏ・ＨＡ・ＮＡ・Ｓｉしてきてもいい？」
「落ち着けってなのは！」
「当麻くんがそう言うなら。じゃあ黒板に書いといてくれる？」
「わかったぜ」

【候補？　写真館】

「次。はい、瑞希ちゃん」
「ウェディング喫茶なんてどうでしょう？」
「なかなか面白そうね」
「・・・・・結婚は人生の墓場」
「ハハハ・・・。当麻君、書いといてね」
「了解」

【候補？　ウェディング喫茶】

「さて、他には――はい、美波ちゃん」
「中華喫茶なんてどう？」
「中華喫茶？」
「そう、他とは違って団子や飲茶を出すの？」
「なるほど。面白そうだね、当麻君。お願い」
「はいよ～」

【候補？　中華喫茶】

と書き終えたところで鉄人を始めとし、5人の先生が入ってきた。

「皆、出し物は決まったか？」

「今のところ、候補は黒板に書いてある三つです」

【候補？　写真館】

【候補？　ウェディング喫茶】

【候補？　中華喫茶】

「なるほど。いい意見だな」

「ありがとうございます」

「まぁ、がんばってくれ」

「はい」

☆

多数決の結果、中華喫茶になった。

「じゃあ、皆。協力して準備してね！」

『はい！』

そして、厨房班とホール班に別れた。ホール班は女子全員と僕、当麻になった。

その理由は「女子が集まりやすいから」らしい、なんか不幸だ。

☆

「明久。話がある」
「どしたの？雄二？」
「ああ。ちょっとな学園長室に行くから付いてきてくれ」
「わかったよ。でもどうして？」「島田と姫路の話が聞こえたんだがどうやら姫路が転校するらしい」
「ええっ！？本当なの！？」
「ああ。だから島田に頼まれて学園長に話に行こうとしたんだ」
「へぇ～。けどよく雄二がやったね？」
「それは姫路がいなくなるとAクラスに勝てなくなるからな。もう俺たちは負けるわけにはいかないだろう？」
「確かに。僕らの人生が懸かってるからね」
「そういうことだ。ほら、行くぞ」

僕らが学園長室に着くとこんな話が聞こえてきた。

『じゃあ、頼んださよ』
『わかったぜ』
『しゃあねェ、やってやるかァ』

この声は当麻と一方通行君？

「どうした、明久？」
「中に当麻たちがいるみたいだよ」
「まぁいい。入るぞ」
「「失礼しまーす」」
「俺たちは戻るべきなのか？」
「かもなァ」

帰ろうとする当麻と一方通行君。やっぱ邪魔だったみたいだ。

「待ちな、アンタら。そこでちょっと待ってな」

「んで、そっちのガキどもは何の用だい？」

「Fクラスの設備について話に来ました」

「そうかい。そういうことは教頭に言っとくれ。あと、目上の人に話すときには名前を言うのが礼儀だよ」

「失礼しました。俺は２－Ｆ代表の坂本雄二。それでこっちは――２－Ａの御堂真実さんの夫（仮）です」

ちょっと待てぇっ！

「ほぅ・・・・。そうかい。アンタらがＦクラスの坂本と吉井かい」

「ちょっと待って学園長！僕はまだ名前を言ってませんよね！？」

どうして、あの紹介で僕の名前がわかるんだろう。

「気が変わったよ。話を聞いてやろうじゃないか」

～説明終了～

「つまり、アンタたちはクラスの設備を良くしてクラスメイトの転校を阻止したいわけだ」

「そのとおりだ」

「いいさね。その代わり、条件がある」

「条件？」

「召喚大会での賞品を回収して欲しいのさ」

「賞品ですか？」

「この副賞のチケットなんだけど、アンタら４人みたいに妻がいる

なら別なんだけどね」
「「誰が妻だ！誰が！」」
「・・・・（ポォー）／／」
「フン」

当麻はなんか顔を赤くし始めた。

「で、そのチケットをアンタらに回収して欲しいわけだ」
「当麻たちじゃダメなんですか？」
「彼らには別の用事があるからね」
「わかりました。僕たちが優勝したら教室の改修と設備の向上をしてくれるんですよね？」
「何を言ってるんだい。やってやるのは設備の改修だけ。けど設備は清涼祭での利益でなら好きにしていいよ」
「了解だ。ただしこちらからも条件がある」
「対戦表が決まったら、その科目の指定を俺にやらせてもらいたい」
「ふむ・・・・。いいよ、そのくらいなら協力しようじゃないか」
「・・・・・ありがとうございます」
「ここまでしてやったんだ。必ず優勝するさね」
「「おうよっ！」」

こうして、文月学園最低コンビが誕生した。

☆

「じゃあ、アンタらは決勝にまで残ってくれればいいよ」
「じゃあ、優勝はあいつらに譲ればいいんだな？」
「そうさね」
「用が済んだならオレたちは帰るぞ」

「悪かったさね」
「失礼しました！」「失礼しましたァ」
バタンッ！
「ふむ、理事長は何を考えてるさね。召喚大会の決勝に進んだペアをフィアンマ・アックア先生ペアか三年のＡクラス主席と次席のペアと戦わせるなんてね」

第１３問　Ｆクラスの出し物決めと学園の思惑？（後書き）

今回からたまにですがバカテストを入れていくつもりです。

真実「今回の話私あんまり出てないんだけど？」

最初の明久の回想で出たじゃないですか。

真実「む～。次回からちゃんと出してよね」

なるべく出すようにします。

真実「三年のＡクラスの主席と次席って誰？私知らないんだけど」

それは内緒です。ヒントをすると主席は禁書のキャラ。次席はリリなののキャラです。

真実「禁書？リリなの？まぁ、いいや。次回も見てください！」

第１４問　清涼祭開催（前書き）

『喫茶店を経営する場合、制服はどんなものがいいですか？』

姫路瑞希の答え
『家庭用の可愛いエプロン』

教師のコメント
いかにも学園祭らしいですね。コストもかからないですし、良い考えです。

土屋康太の答え
『スカートは膝上１５センチ、胸元はエプロンドレスのように若干の強調をしながらも品を保つ。色は白を基調とした薄い青が望ましい。トレイは輝く銀で照り返しが得られるくらいのものを用意し裏にはロゴを入れる。靴は５センチ程度のひーるを――――――』

教師のコメント
裏面までびっしりと書きこまなくても。

吉井明久の答え
『ブラジャー』

教師のコメント
ブレザーの間違いと信じています

上条当麻の答え
『なのはなら何でも似合うと「またアンタはぁ！」「ぎゃぁーっ！
不幸だー！」「当麻君大胆だよ／／／」』

教師のコメント
こんなところで惚気ないでください。

第１４問　清涼祭開催

「いつもはただのバカに見えるけど、坂本の統率力は凄いわね」
「ホント、いつもはただのバカなのにね」

雄二がこんなにやる気なのはやはり自分のことが懸かってるからだろう。まぁ、僕もなんだけど・・・。

「なかなかいい感じになってきたわね」
「そうだな。なのはの家からテーブルを借りてきて、秀吉がクロスを持ってきてくれたからな」

そう、いつも使っているみかん箱はいったん外に出しといて、きれいなテーブルを教室に配置している。

「ムッツリーニ、厨房の方のオーケー？」
「・・・・味見用」
「美味そうだな」
「土屋、これ食べちゃってもいいの？」
「・・・・・（コクリ）」
「美味しいです！」
「本当！表面はカリカリで中はモチモチで食感も良いし！」
「甘すぎないところもいいのう」

と、大絶賛。皆甘いものが好きなんだなぁ。

「俺も貰っていいか？」
「あ、僕も！」
「・・・・・（コクコク）」

ムッツリーニが残っている団子を差し出す。
「「ふむふむ。表面はゴリゴリでありながら中はネバネバ。甘すぎず、辛すぎる味わいがとっても――――んゴバっ」」
僕と当麻の口からありえない音が出た。何が起きたんだ！？
「当麻君！？アキ君！？大丈夫！？」
「大丈夫だよ・・・」
「・・・・・（ピクッピクッ）」
「アキ君、これ食べて！」
「これは？」
「私の作った団子だよ。当麻君ア、アーン／／／」
なのはのおかげで僕らはなんとか助かった・・・。当麻が羨ましいけど今は自分のことが大事だ。

「うーっす。戻ったぞー」
「あ、雄二。おかえり」
「当麻のヤツはなんで高町に膝枕されているんだ？」
「それはこれが理由だよ」
「ま、まさか姫路の作った料理か！？」
「・・・うん」
「当麻。お前のことは忘れない」
「上条さんはまだ生きてますよ！「しっかり休んでて！」わ、悪い」
なんか、三人で漫才みたいなことをやってるんだけど、
「そういえば、雄二はどこに行っておったのじゃ？」

「ああ。少し話し合いにな」
実は学園長室に行って例の科目の指定をしてきたところだ。でも、フェアではないので皆には言えない。
「そうですか～。お疲れ様でした」
「いやいや、気にするな。それより、喫茶店はいつでもいけるな？」
「バッチリじゃ」
「・・・・お茶と飲茶も大丈夫」
「もちろんだよ」
ようやく当麻が復活していた。いつか誰か大変なことになりそうだ・・・。
「よし。俺たちは召喚大会があるからな。喫茶店は秀吉とムッツリーニに任せる」
「当麻君も出るの？」
「ああ。一方通行と出るんだ」
「・・・当麻君は誰と行くつもり？」
「ん？ペアチケットか？」
「うん。フェイトちゃんは一方通行君と行くって言ってたよ」
「そうか。じゃあ、なのはは俺が連れてってやるよ」
「ふぇ？／／／」
「嫌か？」
「ううん。嫌なわけないよ。約束だからね！／／／」
「ああ」
そろそろ、当麻を攻撃していいよね？雄二も攻撃したくてうずうずしてる。

「なんか、殺気がすごくするんでせうが。っと、時間だ。行ってくる」
「待って！私も試合だからいっしょに行こ」
「俺たちも行くか明久」
「うん、なのはがいると当麻に攻撃できないからね」
そうして、僕らは教室を後にした。

～Aクラス～

「じゃあ、一方通行君とフェイト、代表に真実は今から試合ね」
「アア」「そだよ～」
チッ、フェイトにチケットを頼まれたからなァ。頑張らないと後が怖いぜェ。それに当麻のヤツも高町に一緒に行こうって誘われただろうしなァ。
「じゃあ、行こう皆♪」
「うん」
「・・・・頑張る」
ハァ、めんどい相手とはやりたかねェなァ。まァ、相手が腕輪を使ってきたら当麻に任せるとしますかァ。

第１４問　清涼祭開催（後書き）

真実「Ａクラスの話が最後にあったね」

うん。これからたまにだけど入れていこうと思ってる。

真実「トーナメントで私たちと明久たちは戦うの？」

もちろん。あの技を使う予定です。

真実「当麻君は大胆だね。たぶん本人は何も考えてないと思うけど」

たぶんね・・・。けど、いつ当麻と知り合ったの？

真実「えっと道場の練習の時に、なのはたちと来てたんだよ」

そうか、ではまた次回も見てください！

真実「見てね～」

第１５問　清涼祭一日目　波乱の学園祭

「えー。それでは、試験召喚大会一回戦を始めます」

校庭に作られた特設ステージ。今回立会人を務めるのは数学の木内先生。当然勝負科目は数学となる。

「頑張ろうね、律子」

「うん」

対戦相手の女子二人が頷き合う。微笑ましい光景だ。

「では、召喚して下さい」

「「試獣召喚（サモン）っ！」」

『Ｂクラス　岩下律子　＆　Ｂクラス　菊入真由美
数学　１７９点　＆　１６３点』

向こうの召喚獣は二人とも似たような装備の召喚獣だ。

「さて、僕らも召喚しようか」

「そうだな」

「「試獣召喚（サモン）」」

『Ｆクラス　坂本雄二　＆　Ｆクラス　吉井明久
数学　１７９点　＆　９４点』

「すごい、雄二！どうしてそんな点数に！」
「俺はな今度こそＡクラスに勝つために勉強を続けているんだ」
「Ａクラスに？雄二そこまでして・・・」
「翔子に聞かれたんだ」
「何を？」
「式はどこで挙げたいかと・・・俺は俺の人生を守るためにＡクラスに勝たなくちゃいけないんだ！」
「・・・・雄二。そこまでして」
「一蓮托生だ。無様な真似見せんじゃねぇぞ！」
「わかってる。僕も勉強してきたんだ」
「なかなかだな。カンニングでもしたのか？」
「違うよ！真実に勉強教えてもらってるんだよ！」

そう。Ａクラス戦の後、真実がアパートの隣の部屋に引っ越してきて、よく僕の部屋にやってくるんだよね。

「律子！」
「真由美！」
「「行くわよ！」」

向こうの二人は名前を呼び合って、僕らに攻撃してきた。

「へぇ～。息は合ってるみたいだね」
「オンナノコの仲良しごっことしては、それなりに良くできているな」
「「むぅ」」

しょうがない。僕らが本当のコンビネーションを見してあげるよ！

「雄二！」

「明久！」
「「後は任せたっ！」」
僕らは二人そろって大きく飛び退った。
「お互いに相手に任せてどうするのさ！」
「こっちのセリフだ！ばかやろう！」
はっ！凄く蔑んだ目で見られてる！
「ふむ。コンビネーションは五分五分というところか」
「「ええっ！？」」
さて、今からが本当の勝負だ！
「よし、明久。例の作戦で行くぞ」
「作戦？」
「明久が片方の敵を引き付けて、その隙にお前がもう片方を倒す」
「それって、両方とも僕じゃないかっ！」
ふざけるなよこの野郎。そんなの出来っこない！
「仕方ない。俺が攻撃を担当する。お前は盾を担当しろ」
「僕だけやられるじゃないか！」
攻撃が当たるとこっちは痛いんだよ！
「ここまできたら小細工は無用！一人一殺で真っ向勝負だ！」
「・・・・作戦は？」

今までのやり取りはなんだったんだ・・・・。

「やぁっ！」

「やばっ！」

「攻撃が当たらない！？」

召喚獣の使い方は慣れてるからね。

「今度はこっちから！行くぞ！」

雄二のほうでは、相手を圧倒していた。僕たち悪役っぽいね。

「「今だぁっ！！」」

僕らの召喚獣が相手を羽交い絞めして、攻撃を加えていた。

『ブーッ！ブーッ！』

『信じられないわ！』

観客からの答えが痛い。

「くぅぅっ！悔しい！」

「あんなのに負けるなんて恥ずかしい！」

「・・・勝者、坂本・吉井ペア」

なんかあまり嬉しくない・・・・。

～Fクラス教室～

「おう、お帰り」
「二人とも、お疲れ様」
当麻となのはが出迎えてくれた。
「二人とももう終わったの？」
「ああ。一方通行が瞬殺だよ」
「私もフェイトちゃんが一撃でね」
「喫茶店の調子はどうだ？」
「あ、うん。いい感じだよ」
「おい、いつまで待たせるんだよ」
「どうなってんだ、この店は？注文も取りにこねぇのかよ」
「すぐ伺います！少々お待ちを！」
「あぁ！ずっと待ってんだよ！」
「他も回んなきゃいけないのに待たせてんじゃねぇよタコ！」
「す、すいません。少しお待ちください！」
なんだ、あいつら！偉そうに！
「はやくしろよな！」
「まったくだ！」
「お前ら、うるせぇぞ」
「そうだね、これは営業妨害だね」
あれは生徒会長のクロノ先輩と誰だろう？
「ゲッ、垣根にクロノ」
「どうしてここに？お前ら巡回じゃねぇのか？」
「俺に常識は通用しねぇからな」
「君たちには少しついてきてもらう。生活指導担当に頼まれたから

ね」

あ、あの二人が連れてかれた。

「このクラスの責任者はいるか？」

「あ、俺です。あなたは？」

「俺は3年Aクラス代表の垣根帝督だ。二年だと一方通行や上条と知り合いだな」

「そうですか。わざわざありがとうございます」

「アイツらが迷惑かけたみたいだからな。スマンかったな。それじゃ」

なんか礼儀正しい人だったな。Aクラス代表ってことは3年の中で一番頭良いんだよね。

「おっと、時間だ。さて明久二回戦に行ってくるぞ」

「うん。じゃあ皆、任せたね」

～特設ステージ～

「二回戦の相手はっと」

「よ、吉井に坂本！？お前らが相手か！」

「どうしたの恭二？Fクラスのバカコンビが相手じゃない」

「「「「「試獣召喚（サモン）」」」」」

『Bクラス　根本恭二　&　Cクラス　小山友香

英語W　１９９点　&　１６５点』

流石はＢクラスとＣクラスの代表コンビ。点数も立派なもんだ。

『Ｆクラス　坂本雄二　＆　Ｆクラス　吉井明久
英語Ｗ　７３点　＆　６２点』

「雄二。Ａクラスに勝つために勉強してたんじゃないの？」
「いっぺんに全教科は無理だぁっ！」
「二人ともこの点数でどうするのさぁ！？」
「大丈夫だ。これを使う」

そういって、雄二が取り出したのはこの間の試召戦争でとった根本君の女装写真集だ。

「根本！これを見ろ！」
「そ、それは！わ、わかった坂本。降参する、この試合はお前たちの勝ちでいい。だからその写真は」
「Ｃクラス代表！これが欲しいか！」
「いいわ。私たちの負けよ」

『勝者！坂本・吉井ペア！』

「頼む、友香！説明させてくれ！」
「恭二。別れましょ」
「友香ぁぁーっ！！」

根本君の叫び声が聞こえたけど気にしないでおこう。人の気持ちを踏みにじると天罰が下るって、本当なんだぁ・・・。

～Ｆクラス教室～

「ただいまー・・・って、当麻？誰その子たち？」
「えっと、なのはの家の養子だよ」
「高町ヴィヴィオです！」
「高町アインハルトです」
「ねぇ当麻パパ？この『異端者は死刑！』『上条さんは何もしてないでせうよ！』行っちゃた～」
「僕の名前は吉井明久だよ。よろしくねヴィヴィオちゃん。アインハルトちゃん」
「バカなお兄ちゃんお久しぶりです！」
「あ、葉月ちゃん！」
「ヴィヴィオちゃんも来てたですか～？」

ヴィヴィオちゃんと葉月ちゃんは知り合いなのか。そういえば、客の数が減ってるな。

「そういえば、こちらに来る最中に変な噂を聞いたのですが」
「噂？」

当麻、復活するの早！

「どこら辺でその噂を聞いたか教えてくれるか？」
「えっとですね・・・確か新校舎の方でしたね。メイド喫茶があった気がします」
「よし！今すぐ行こう！」
「そうだな！綿密に調査しないとな！」
「ああ！しっかりチェックしないとな！」

聞いた瞬間全力ダッシュ。当麻はなのはたちから制裁を受けていた。

☆

「明久、ここはやめよう」
「そ、そうだね。」

まさかAクラスとは、なんたる不幸・・・。

「ほら、明久、雄二。さっさと入るぞ」
「そうだよ、霧島さんや真実ちゃんから逃げるなんてダメだよ」

当麻となのはによって無理やり連れてかれてしまった。

『失礼しまーす』
「おかえりなさいませ～、ご主人様にお嬢様」
「・・・・おかえりなさいませ」

出迎えたのは真実と霧島さん。二人とも綺麗だな～。はっ、僕は何を！そして、二人は僕と雄二に

「「おかえりなさいませ。今夜は帰らせません、ダーリン」」

なんか凄いことを言われた。急いで逃げないと・・・。

「ここから先は一方通行だ。あきらめるンだなァ。吉井に坂本」

一方通行君によって逃げ口が封じられていた。そ、そんな・・・。

「お席に案内します。人数が多いので二手に別れてもらいますがよ

ろしいでしょうか？」
「大丈夫だぜ」
ということで、なのはたち親子と当麻に僕らと別れた。
「・・・・では、メニューをどうぞ」
「ウチは『ふわふわシフォンケーキ』で」
「あ、私もそれがいいです」
「葉月もー！」
女の子三人は仲良くシフォンケーキ。
「「えっと（んじゃ）、僕は（俺は）――――」」
「・・・・ご注文を繰り返します」
遮るような霧島さんの声。僕らまだ注文してないんだけど・・・・。
「・・・・『ふわふわシフォンケーキ』を三つ、『メイドとの婚姻届』が二つ。以上でよろしいですか？」
「「全然よろしくねぇぞっ（ないよ）！？」」
まさか、僕らが素直にならないからって強硬手段にでるとは。
「・・・・では食器をご用意致します」
女の子三人のところにはフォークが、僕と雄二の前には実印と朱肉が用意された。
「・・・・ではメイドとの新婚生活を想像しながらお待ち下さい」

真実はいつ僕の家の実印を手に入れたんだろう！？まさか姉さんが！？

「「雄二（明久）。僕（俺）はどうしても召喚大会で優勝しないといけないんだ・・・・！」」

僕らの気持ちはいつでも一つだ。

『ところでアインハルト。君の言ってた場所ってここら辺か？』

『あ、はい。そうですよ』

向こうの席はなんか家族みたいだ。知らない子が三人ほど混じってるけど。

『ちくしょー。垣根たちのせいで召喚大会が不戦敗になっちまったぜ』

『ああ。まったくやってらんないぜ』

あいつらは垣根先輩たちに連れてかれた、

『なぁ、常村『フン！』（バタリ）』

『どうした夏川！？ゴハッ！（バタン）』

『まだ生活指導は終わってないのである』

『そうだな。お前らには計画を洗いざらい話してもらわないとな』

常夏コンビはアックア先生とフィアンマ先生に連れてかれた。フィアンマ先生の言ってたことは聞こえなかったけど。

「雄二。そろそろ三回戦の時間だよ」

「何？もうそんな時間か？」

時間がやってきて僕らは婚姻届に判を押さずに済んだ。助かった。

『じゃあ、私たちもいったん戻るとしようか』
『ああ、そうだな。ヴィヴィオにアインハルトも戻るぞ』
『はーい！それじゃエリオ君、キャロちゃん、ルールー！またね！』
『それでは皆さんまた』
『バイバーイ！』

やっぱりあの４人は家族にしか見えないんですけど・・・。まぁ、なのはがいるから当麻には攻撃しないけどね。

第１５問　清涼祭一日目　波乱の学園祭（後書き）

いきなりですが皆さんに質問です。三回戦以降当麻＆一方通行ペアの戦いも入れた方がいいですかね？ぜひ感想のところに書いてください。

真実「なんか最後のほうは怪しい雰囲気が出てたね。これからどうなるのかな？」

そのことについては次回以降の話で。

真実「なのははいいなぁ。私もいつか明久とあんな感じになりたいな～」

頑張ってアピールすればきっとそうなるよ。

真実「うん、頑張るよ！次回もよろしくおねがいします！」

第１６問　清涼祭一日目　誘拐事件！？　（前書き）

しばらく更新してなくてすみません＞（＿　＿）＜

だいぶテストや行事で時間がなかったもので・・・

第１６問　清涼祭一日目　誘拐事件！？

『それでは、三回戦を始めたいと思います。出場者は前へどうぞ』

今回の勝負の相手は、姫路さん&美波ペアだ。

「アキに坂本。ここまでよく勝ち残ってきたわね。でも、ウチらには勝てるとは思ってないでしょう？」

美波が僕らに対して余裕の笑みを浮かべている。三年生の出場者が少ない今、この二人は優勝候補の一つだから当然かもしれない。

「甘いな島田。お前の召喚獣の点数ならまだ分からないぞ」

『Ｆクラス　姫路瑞希　&　Ｆクラス　島田美波
古典　３９９点　&　６点』

「６点しかない召喚獣なんていないも同然だよね！」

「もちろんだ！いくぞ、明久！」

「うん！」

『試獣（サモン）召喚！！』

『Ｆクラス　坂本雄二　&　Ｆクラス　吉井明久
古典　２１１点　&　１０点』

「・・・・・・明久」

「・・・・古典はまだ勉強してなかったんだ。・・・・ごめん」

すごくいたたまれない雰囲気だ。

『明久！がんばったらご褒美あげるよ！』
『・・・・雄二も』
ま、真実！？ここでそんなこと言ったら！
「はぁっ！」
「やぁっ！」
ほら、やっぱり！
「しぶといわね！おとなしくやられなさい！」
「一撃であの世におくってあげますから・・・」
その点数だったらほんとに痛みでやられちゃうよ！
「明久！姫路の武器を封じろ！俺がなんとかする！」
「う、うん。わかった！やってみる」
ガシッ
なんとか武器を封じ込むことができた。後は、
「雄二！今だ！僕を巻き込まないように！」
「くぅぅらぁぁえぇっ！！」
「雄二ぃぃっ！」
雄二によって僕の召喚獣と二人の召喚獣がやられた。
『勝者！坂本・吉井ペア！』

なんか釈然としない勝ち方だ・・・・。そう思いながら僕は気を失った。

☆

僕が目を覚ますとFクラスにいた。聞いた話だと当麻たちは木下さんと工藤さんのペアに圧勝したらしい。

「明久、次の相手は翔子たちだ。絶対に勝つぞ」
「雄二。何か考えがあるの？」
「あるといえばあるんだが・・・」
「・・・・？」

どうしたんだろう？なんで教えてくれないのかな？

「まぁ、二人とも。がんばってきてくれ」
「あれ？当麻は次の試合誰が相手なの？」
「私たちだよ！」
「なのはとハラオウンさん？」
「そうだよ」

当麻たちは勝てるのだろうか？すごく心配だ。

「とりあえず、会場に行くぞ」
「あ、うん」

☆

「お待たせいたしました！これより準決勝を開始したいと思います！」

僕らが到着すると、審判を務める先生のアナウンスが流れた。ギリギリ間に合ったみたいだ。

「・・・・雄二。邪魔しないで」
「そうはいくか。俺はまだまだやりたいことがたくさんあるんだ！いくぞ、明久！」
「うん！それで僕はどうすれば「すまんな」くぺっ！？」
「（秀吉、頼む）」
「（うむ）」
「真実！僕は優勝したら君と如月グランドパークに行きたいんだ！だからお願い！」
「そうなの？だったら私は降参します」

僕が気を取り戻すととんでもないことが聞こえた。雄二やってくれたな！

「さて、後は翔子だけだな」
「（雄二！僕にいい作戦があるよ）」
「（なんだ？それは）」
「（僕の言ったことをそのまま言うんだ）」
「わかった。任せた」
〈翔子、俺の話を聞いてくれ〉
「翔子、俺の話を聞いてくれ」

雄二が僕の台詞をそのまま告げる。よしよし。

〈俺はどうしても優勝したい〉
「俺はどうしても優勝したい」
〈俺は大会で優勝したらお前にプロポーズするんだ〉
「俺は大会で優勝したらお前にプロポーズするんだって誰がそんなこと言うか！ボケぇ！」
「どせぇい！」
「くぴっ！？」

さて、雄二。君もいっしょに行こうじゃないか。

「（秀吉、よろしく）」
「（うむ、心得た）」

「俺は大会で優勝したらお前にプロポーズするんだ！愛してる翔子おぉっ！」
「・・・・棄権します」

『赤コーナー危険により、勝者坂本・吉井ペア！』

なんだろう。優勝したくなくなってきたよ・・・・。

☆

私上条当麻はただいまピンチを迎えております。

「ねぇ、当麻君？ヴィヴィオとアインハルトに何を言わせてるの？」

一言で言い表すと目の前に魔王がいます。一方通行(アクセラレータ)はフェイトに土下座している。

「「当麻君（一方通行）Ｏ・ＨＡ・ＮＡ・ＳＨＩしよっか？」」
「「謝りますから本気でやめてください」」
「ダメだよ。許さないよ」
「じゃ、じゃあ。この試合に俺たちが勝ったら許してくれ！な？」
「いいよ。負けたら今夜は帰さないから」
『試獣(サモン)召喚！』

『Ｆクラス　上条当麻　＆　Ａクラス　一方通行(アクセラレータ)
化学　１３６点　＆　４５２点』

まぁ、そこそこの出来だな。

『Ｆクラス　高町なのは　＆　Ａクラス　フェイト・Ｔ・ハラオウン
化学　４０１点　＆　４０６点』

まずい展開になってきたと、上条さんは分析してみます。

「全力全開っ！」
”Ｓｔａｒｌｉｇｈｔ　Ｂｒｅａｋｅｒ”

いきなりでせうか！？

「当麻ァ、頼むぞォ」
「ええっ！？」

パキィーン

打ち消せてない！右手痛っ！

「さて、三人まとめてふっとンじまェ！」

「ちょっと、待て！一方通行（アクセラレータ）！」

「「きゃぁぁっ！」」

「不幸だぁぁぁっ！！！」

『Ｆクラス　上条当麻　＆　Ａクラス　一方通行（アクセラレータ）

化学　０点　＆　４５２点』

『Ｆクラス　高町なのは　＆　Ａクラス　フェイト・Ｔ・ハラオウン

化学　０点　＆　０点』

『勝者上条・一方通行（アクセラレータ）ペア！』

☆

「てんめぇ！なんてことしやがるんだ！

「雄二だってしたじゃないか！」

「一方通行（アクセラレータ）。わかってるよな？」

「はン、知ったことかァ」

こっちでは、僕と雄二が向こうでは当麻と一方通行（アクセラレータ）君がもめていた。

「・・・・雄二」

「ムッツリーニか。何かあったのか？」

「・・・・ウェイトレスが連れてかれた」

「何！？誰が連れてかれたんだ！？」
なんでこんなことが起きてるの！？
「・・・高町、ハラオウン、姫路、島田、秀吉、子どもたちが連れてかれたと思う」
バン！
連れてかれたメンバーを聞いた瞬間、僕らはすぐさま走り出した。
「当麻！場所わかる！？」
「（カミやん。人質がいるのはカラオケボックスだにゃー）」
「助かった！ありがとう！」
僕らがカラオケボックスにつくとこんな声が聞こえてきた。
『お姉ちゃん、怖いよ』
『お姉ちゃんだってさ！可愛いーーーー！！！』
『ヴィヴィオに近寄らないで！』
『なんだよ、おまえ』
『助けてってミサカはミサカは言ってみる』
「こいつらぶち殺す」「生きて帰れると思うなよォ、この三下どもがァ！」
「ふ、二人とも」
僕の静止もむなしく二人は入っていってしまった。
「当麻君？」

「当麻お兄ちゃん！」
「一方通行（アクセラレータ）行くぞ」
「アア」
「こ、こいつら！上条に一方通行（アクセラレータ）だぞ！」
「ま、まじかよ！」
「さァて、スクラップの時間だぜェ！！クソ野郎どもがァ！」
「お前らは早くこっちに来い！」
『う、うん』

当麻たちが入って数分後、誘拐したグループは皆やられていた。

「どういう状況だ！？これは！？」
「当麻と一方通行（アクセラレータ）君が二人で倒しちゃったよ」

皆が無事で本当に良かったよ。

「当麻君、ありがとう」
「いやいや、上条さんは何もしてないぜ。礼なら一方通行に言うんだな」
「そんなことないよ！二人のおかげだよ！」
「そう言ってくれるとうれしいぜ」

こちら側では当麻となのはが、

「怖かった～ってミサカはミサカはあなたに抱き着きながら言ってみる」
「うるせェ、なンでこンなとこにいやがったンだクソガキ」

あちら側では一方通行君と御坂さんに似た子どもが話していた。

「明久、学園に戻るぞ」
「えっ、なんで？」
「この騒ぎに関わりのあるやつに心当たりがある」
一体誰のことなんだろうと思いながら僕らは学園に戻っていった。

第１６問　清涼祭一日目　誘拐事件！？（後書き）

感想と評価お待ちしております。

次回の話も近いうちに更新する予定です。

第１７問　清涼際二日目　召喚大会決勝（前書き）

今回は明久と当麻が戦います。お二人さん、どちらが勝つでしょうか？

真実「明久じゃないかな？」
なのは「当麻君に勝って欲しいよ～」

一体どちらが勝つのでしょうか？

真実・なのは「では、どうぞ！！」

※戦いの際に召喚獣は抜いて書いているのであしからず

第１７問　清涼際二日目　召喚大会決勝

あ誘拐騒ぎも解決して、喫茶店の一日目も終了したＦクラスの教室。そこは僕と雄二の貸しきり状態になっていた。当麻と一方通行（アクセラレータ）君は土御門君に連れられてどっかに行ってしまった。

「明久。そろそろ来る時間だぞ」
「？　来るって、誰が？」
「ババァだ」

ババァというと、学園長のことか。

「学園長がわざわざここに来るの？」
「俺が呼び出した。さっき廊下で会った時に、『話を聞かせろ』ってな」
「話ねぇ・・・・。ダメだよ雄二。一応相手は目上の人なんだから、用事があるならこっちから行かないと」
「用事もクソも・・・・常夏コンビの妨害は先輩や先生のおかげで失敗したが、今回の誘拐事件はババァも関係あるはずだからな。事情を説明させないと気が済まん」
「ババァも関係あるだって！？」

雄二が当然のように告げた台詞は、僕には驚きの内容だった。

「あ、あのババァ！僕らに何か隠してたのか！」

皆があんなことになったんだから文句を言ってやらないと！

「・・・・やれやれ。わざわざ来てやったのに、随分とご挨拶だね

ぇ、ガキどもが」
「来たかババァ」
「出たな！諸悪の根源め！」
「おやおや、いつの間にかアタシが黒幕扱いされてないかい？」
「黒幕ではないだろうが、俺たちに話すべきことを話していないのは充分な裏切りだと思うがな」
「ふむ・・・。そんなに教えて欲しいなら教えてあげるよ。ちょっと待ってな」

そう言うと学園長は少し離れ携帯を取り出した。

「アレイスター理事長」
『なんだ？』
「例のこと話してもいいかい？」
『腕輪のことか？別に構わないさ。ただしプランのことは言うなよ。知っててていいのは貴様と土御門にアックア・フィアンマぐらいだ。垣根帝督とクロノ・ハラオウンは少々感づいているがな』
「了解したさね。そういえばアンタは教頭の悪事を知っていたのかい？」
『もちろんだ。なかなか愉快だったよ。学園自体に危機が及ぶなら潰していたところだがな』
「では、切るよ」
『ふむ』

あ、学園長が戻ってきた。誰と話していたんだろう？

「許可が下りたから話すよ。その代わり誰にも公言しないで欲しい」
「誰の許可を取ったんだ？」
「理事長さね。関わるとアンタらに危険が及ぶから深追いしちゃダメだよ」

「チッ、わかった」
「アタシの目的は如月ハイランドのペアチケットなんかじゃないのさ」
「ペアチケットじゃない！？どういうことですか！？」
「その通りさ。重要なのはもう一つの賞品のことなのさ」
「もう一つというと、『白金の腕輪』とやらか」
「ああ。あの特殊能力がつくとかなんとかってやつ？」

調べてみたら、白金の腕輪は二つあるらしい。
一つはテストの点数を二分して二体の召喚獣を同時に喚び出すことのできる腕輪。もう一つは先生の代わりに立会人になって召喚用のフィールドを作ることのできる腕輪。こっちは使用者の点数に応じて召喚可能範囲が変わるらしい。召喚の科目はランダムで選択されるとかなんとか。

「そうさ。その腕輪をアンタらに勝ち取って貰いたかったのさ」
「僕らが？当麻たちじゃなくて？」
「俺たちじゃなきゃいけない欠陥があったんだろうさ」
「そこのガキの言うとおりさ。・・・欠陥があったんだよ」
「その欠陥は俺たちであれば問題ないのか？」
「そうさ。不具合は入出力が一定水準を超えた時だけだからね。だから他の生徒には頼めなかったのさ」
「なるほどな。当麻たちじゃダメなわけだな」
「えーっと、つまり・・・？」
「アンタらみたいな『優勝の可能性を持つ低得点者』ってのが一番都合よかったってわけさ」
「これは僕らは褒められてるの？バカにされてるの？」
「バカにされてるんだろう」
「なんだとババァ！けど当麻もバカだよ？」
「上条はダメさね。あの右手があるせいで腕輪の力が発動できない

からね」

あれ？僕だけがバカみたい？

「そうか。つまりこの一連の妨害を起こしてきたのは学園長の失脚を狙ってる人間――教頭ってことか」

「ご名答。この手引きは教頭の竹原によるものさ。だけど、ことごとく失敗されてるみたいだけどね」

「垣根先輩たちに常夏コンビが、当麻と一方通行（アクセラレータ）にチンピラ共がやられたからな」

「あ、なら。いざとなったら決勝の相手に事情を話して――――」

「ダメだ、それじゃあ疑われる」

「ちょうどいい機会じゃないか。観察処分者同士なんて滅多に戦えるものじゃないよ。」

「そうだぞ明久。当麻のほうがお前よりも操作技術が上なんだからしっかり学んどけ」

確かに今まで当麻と戦ったことなかったから楽しみかも。

「二人とも、明日は頼んだよ」

「「はい」」

～理事長室～

「では、二人とも。明日のことはわかってるな」

「ああ」

「オレが坂本と相討ちになって当麻が吉井にギリギリで負ければいいンだなァ」

「三年ペアとの試合の挑戦権は決勝に進んだペアだからな」

「フィアンマ先生とアックア先生もじゃないのかにゃー？」
「フィアンマの方は『最近、俺様の召喚獣の第三の右腕の調子が悪い。だから出ねぇ』とか前に言ってきたぞ」
「そうなのかにゃー（絶対めんどくさいだけだにゃー）」
「今日はこの辺にしとこう。帰っていいぞ」
「「「了解（わかったにゃー）」」」

バタン

「さて、そろそろ吉井明久の召喚獣が覚醒するだろう。そうすればプランが２６３９から２３７４まで縮小されるだろう」

～翌日～

僕は何故か一緒に寝てた真実と一緒に登校してた。ていうかいつ僕の部屋入ったの！？

「おはよう、明久。今日はよろしくな」
「おはよう、アキ君」
「おはよう、当麻になのは。二人とも早いね」
「朝一番でテスト受けないといかないからな。なのはは昨日のことがあるし、心配だったからな」
「私は当麻君と一緒に登校して、勉強教えてって頼まれたからだよ」

ガラガラ

「おう、早いな。お前ら」
「「「おはよう、雄二（坂本君）」」」
「ああ、おはよう。明久、ちゃんと勉強してきただろうな？」

「もちろん」
「そうか。勉強したら少し眠るとするか。決勝まで時間があるしな」
「うん、そうだね」

〜召喚大会会場〜

「いよいよ、決勝だね」

会場を前にドクン、と少しだけ脈が速くなった。相手は当麻に一方通行（アクセラレータ）君だから本気でやらないと。

『さて皆様。長らくお待たせ致しました！これより試験召喚システムによる召喚大会の決勝戦を行います！　出場選手の入場です！』
「さ、入場してください」

先生にポンと背中を叩かれ、僕と雄二は観衆の前に歩み出て行った。

『二年Ｆクラス所属・坂本雄二君と、同じくＦクラス所属・吉井明久君です！皆様拍手でお迎え下さい！』

盛大な拍手が雨のように降ってくる。随分とお客さんが入っているみたいだ。きっとこの中には姫路さんのお父さんもいるのだろう。

『なんと、最高成績のＡクラスを抑えて決勝戦に進んだのは、二年生の最下級であるＦクラスの生徒コンビです！これはＦクラスが最下級という認識を改める必要があるかもしれません！』

（あの司会、嬉しいことを言ってくれるな）
（だね。姫路さんのお父さんに好印象になるね）

『そして対する選手は、こちらも二年生です！　二年Ａクラス所属・一方通行君と、二年Ｆクラス所属・上条当麻君です！　皆様、こちらも拍手でお迎え下さい！』

コールを受けて姿を現したのは当麻と一方通行君だ。

『彼らも含め、このフィールドにはＦクラスの生徒が三人もいます！どういう戦いを見せてくれるのかが非常に楽しみです！』

同じように拍手を受けながら、二人はゆっくりと僕らの前にやってきた。

『それではルールを簡単に説明します。試験召喚獣とはテストの点数に比例した――』

僕らは充分に知ってることなので無視して作戦会議を始めた。

「明久。まずは二人がかりで当麻を倒すぞ。それで倒したらお前は一方通行に隙を作ってくれ」

「どうやって作ればいい？」

「何、走りまくって相手の攻撃をかわし続けてくれればいい」

「わかったよ、がんばろうね！」

「ああ！いくぞ！」

『それでは試合に入りましょう！選手の皆さん、どうぞ！』

「「「「試獣召喚」」」」

掛け声をあげ、それぞれが分身を喚び出した。

『Ａクラス　一方通行（アクセラレータ）　＆　Ｆクラス　上条当麻
日本史　４５２点　＆　１１４点
ＶＳ
Ｆクラス　坂本雄二　＆　Ｆクラス　吉井明久
日本史　２１５点　＆　１６６点』

「明久。作戦通り行くぞ！」
「わかってる！」

雄二の召喚獣が先に当麻の召喚獣に向かって跳びかかった。すると、

「オマエの相手はオレだァ！」
「仕方ない、明久！当麻は任せたぞ！」
「うん！当麻いくよ！」
「来いよ」

僕は剣先を向けながら当麻に向かって走っていった。

「っと・・・！」

当麻がクロスカウンター気味にアッパーを仕掛けてきた。

「くっ！」

なんとか避けることができたが、木刀が遠くに弾かれてしまった。

「ぐぁぁぁっ！」
「（よし、作戦通りだなァ）」

雄二の声が聞こえて見てみると二人の召喚獣が相討ちでやられていた。

『Ａクラス　一方通行（アクセラレータ）　＆　Ｆクラス　上条当麻
日本史　０点　＆　１００点
ＶＳ
Ｆクラス　坂本雄二　＆　Ｆクラス　吉井明久
日本史　０点　＆　１５８点』

「さて、明久。ここは拳での殴り合いといこうじゃないか」

そう言いながら当麻は右拳で僕の脇腹を狙ってきた。

「甘いよ！当麻！」

僕は横へ跳び、当麻の背中に向かって拳を振り下ろした。

「しまった・・・・！なんてな！」

倒れたと思った当麻は踏みこらえて頭突きをしてきた。

「痛っ！」

「ほら、どうした！」

当麻は後ろに跳ばされた僕の襟首を掴み、ひっぱりながら顔に向かって右ストレートを繰り出した。

「ぐわっ！」

『Ａクラス　一方通行（アクセラレータ）　＆　Ｆクラス　上条当麻

日本史　０点　＆　３０点
ＶＳ
Ｆクラス　坂本雄二　＆　Ｆクラス　吉井明久
日本史　０点　＆　３５点』

あんなにあった点数差はもう無くなっていた。さすが当麻だね。

「どうやら次の一撃で終わりのようだな」
「うん、そうだね。いくよ！」

僕と当麻はほぼ同時に相手に向かい殴りかかった。

「明久！この勝負俺の勝ちだ！」
「僕は負けるわけにはいかないんだぁっ！」

『Ａクラス　一方通行（アクセラレータ）　＆　Ｆクラス　上条当麻
日本史　０点　＆　０点
ＶＳ
Ｆクラス　坂本雄二　＆　Ｆクラス　吉井明久
日本史　０点　＆　１点』

『坂本・吉井ペアの勝利です！』

「いぃぃよっしゃぁあぁー！！」
「おめでとう、明久」

全身が痛み、吐き気もする。それでも僕は今、最高の気分に浸っていた。

第１７問　清涼際二日目　召喚大会決勝（後書き）

決勝はすごかったね～。

真実「明久も当麻もかっこよかったよ！」

だね。次回は三年との試合だよ。

真実「明久の能力も出てくるんだって？」

おそらく・・・。

真実「ふーん。次回も見てね～！」

よろしくお願いします。

第１８問　清涼祭二日目　僕の秘められた力！？（前書き）

今回は明久の召喚獣の特殊能力が明かされます。何か意見などがあったら教えてください！

真実「ではっ、始まりま～す」

第１８問　清涼祭二日目　僕の秘められた力！？

「よくやったな！明久！」

雄二がそんなことを言いながら僕に駆け寄ってきた。

「ありがとう、でも結構ギリギリだったよ」

「けど倒したことは確かだ。本当によくやったぞ」

『ただいまより授賞式を行います！』

「さて、行くとするか」

「うん」

～☆～

「まさかアンタらが本当に勝つとは驚いたよ。優勝おめでとう」

「あんたから褒められるとなんか変な感じだな」

「うん。そうだね」

「なんだいその言い様は。はい、賞状と景品だよ」

「これからその腕輪のデモンストレーションとして、彼らと戦ってもらうから」

「彼らって？」

「それはこの俺のことだ」

「もう少し静かに登場できないかな？」

「無理だな」

「ハァッ・・・」

あの人たちは垣根先輩にクロノ生徒会長！？僕らじゃ勝てるわけが

ない！

「学園長。力の差が歴然としすぎだと思うんだが？」

「そこのところはちゃんと考慮してるさね。この勝負は４人対２人だよ」

「４人対２人？」

「アンタらと上条ペア対あの二人だよ。これなら文句ないだろう？」

「当麻と一方通行（アクセラレータ）君がいるなら大丈夫だね」

「私としては、その腕輪の力の紹介ができればいいから、勝ち負けは関係ないよ」

「わかりました」

あの二人はどんな腕輪を使ってくるんだろう？

『ただいまより決勝に進んだ二年ペア二組対三年主席・次席ペアによる新作の腕輪のデモンストレーションを兼ねた試合を行います！』

「久しぶりだな。上条に一方通行」

「なんでこんなことになったんだ？」

「よォ、垣根くゥン」

「今回の相手は『幻想殺し《イマジンブレイカー》』に『一方通行（アクセラレータ）』に観察処分者に元神童か。久々に面白い試合が出来そうだぜ」

『では、始めてください！』

『試獣（サモン）召喚！』

『Ａクラス　一方通行　＆　Ｆクラス　上条当麻　＆　Ｆクラス　坂本雄二　＆　Ｆクラス　吉井明久

総合科目　５３４８点　＆　１６７４点　＆　２１９７点　＆　１

３２１点『

『Ａクラス　垣根帝督　＆　Ａクラス　クロノ・ハラオウン　ＶＳ

総合科目　５２１７点　＆　４７６２点』

「流石三年の学年主席・次席だな。翔子よりも点を取ってやがる」

「クロノ！お前は坂本と吉井をやれ！俺は上条と一方通行をやる！」

「了解。いくぞデュランダル」

''ＯＫ　Ｂｏｓｓ''

「明久！挟み込むぞ」

「任せて！」

僕と雄二はクロノ先輩に向かって左右から同時に攻撃を仕掛けた。

「掛かったね」

「「えっ！？」」

攻撃が当たったと思った瞬間、脚が何かに捕えられた。

「悠久なる凍土　凍てつく棺のうちにて　永遠の眠りを与えよ　凍てつけ！」

''Ｅｔｅｒｎａｌ　Ｃｏｆｆｉｎ''

クロノ先輩が何か唱えたかと思ったら雄二の召喚獣が凍ってきた。

「雄二！」

「明久！」

僕は氷を壊そうと雄二に近づいたら召喚獣の体が突然輝きだした。

「「「なんだ！？」」」

光が収まり出て来たのは黒ではなく白の学ランを着て、両腕にガントレットを着けた僕の召喚獣だった。

「あれ、雄二の召喚獣は！？」

「戦死したわけではなさそうだが一体どこにいったんだ！？」

「隙あり！」

「おっと！」

僕はクロノ先輩の攻撃を紙一重でよけた。その時、召喚獣の腕を見てみると、

「あれって腕輪じゃない？」

「ん？そうだな、使ってみろ明久！」

「おーけい！」

『王牙一閃！！』

腕輪を使ったら、召喚獣が目にも止まらぬ速さで移動し、クロノ先輩の召喚獣に一撃を喰らわした。

『Ａクラス　一方通行　＆　Ｆクラス　上条当麻　＆　Ｆクラス　坂本雄二　＆　Ｆクラス　吉井明久
総合科目　５３４８点　＆　１６７４点　＆　０点　＋　０点』
ＶＳ
『Ａクラス　垣根帝督　＆　Ａクラス　クロノ・ハラオウン
総合科目　５２１７点　＆　０点』

どうやらこの攻撃は一撃必殺の代わりに自分の点数も０になるみたいだ。

「後は当麻たちの戦いを見るだけだね」

「ああ、そうだな（さっきの明久の召喚獣は何だったんだ？）」

～☆～

「向こうの方は終わったみたいだな」

「アア、そうだなァ」

「さてと、腕輪を使うとするか。『未元物質（ダークマター）』」

垣根先輩がそう言うと垣根先輩の召喚獣から六枚の白い翼が生えた。ていうかあれ、

『メルヘンっぽい！』

「心配するな。自覚はある」

「流石メルヘン野郎だなァ、オイ！」

「「ハハハハ！！！」」

なんかあの二人笑いながら戦ってるんだけど・・・・・。

「そろそろ終いにするかァ？」

「ああ、そうだな」

垣根先輩が翼を一枚振るうと一方通行君はそれを掴み、当麻に向かって投げた。

「ええっ！！！？？？？」
「「（ニヤリ）」」
「不幸だぁぁぁぁっ！！」

『Ａクラス　一方通行　＆　Ｆクラス　上条当麻　＆　Ｆクラス
坂本雄二　＆　Ｆクラス　吉井明久
総合科目　３４８６点　＆　０点　＆　０点　＋　０点』
ＶＳ
『Ａクラス　垣根帝督　＆　Ａクラス　クロノ・ハラオウン
総合科目　３２２７点　＆　０点』

当麻・・・・。ドンマイ・・・・。

「さーて、十分楽しめたし降参するかな」
「それでいいンですかァ？」
「ああ、アレイスターも上条がいないんじゃこの試合に価値がないと思ってるだろうしな」
「まァ、そうだな」

『この試合は二年チームの勝利だぁっ！！』
『おおっっ！！』

僕らは結局腕輪を使わなかったので簡単に腕輪を披露して、教室に戻っていった。

～☆～

『ただいまの時刻をもって、清涼祭の一般公開を終了しました。各生徒は速やかに撤収作業を行ってください』

「終わった・・・・」
「疲れたのう」
「・・・・（コクコク）」
放送を聞いた途端、体から力が抜けてく。あと、一方通行君はなのはとハラオウンさんからＯ・ＨＡ・ＮＡ・ＳＨＩを試合後にくらってました。

「おい明久。お客様だぞ」
「お客様？誰？」
「俺だぜい」
「土御門君？」
「そうだにゃー。お前さんにちょっと着いてきてほしいんだぜい」
「こっちは俺たちに任せて行って来い」
「う、うん」
一体、どこに行くんだろう？

～理事長室～

「一言注意しておく。よく聞いとけよ」
「わ、わかった」
土御門君の口調が変わった？
「この中で見たことは他言無用だ。話したらお前だけではなく周りのやつにも被害が及ぶぞ。いいな？」
「・・・・（コクコク）」

「ならいい。よし入るにゃー」

ガチャ

「よく来たな。吉井明久」

「えっと、あなたは？」

「自己紹介が遅れたな。この学園の理事長のアレイスター＝クロウリーだ」

「よ、よろしくお願いします」

「君をここに呼んだのは他でもない。今日の三年との試合のあの姿についてだ」

「知ってるんですか！？」

「もちろんだ。あのシステムをお前の召喚獣に組み込んだのは私だからな」

「どうして？」

「おっと、これ以上は教えることはできない。」

「知らないほうが身のためだぜい」

「そういうことだ。あの状態は上条の右手と同じように君の召喚獣が持つ唯一の能力だ」

「能力？」

「ああ、またの名を『Ｃ・Ａ・Ｉ（瞬時武装換装システム）』という。」

「『Ｃ・Ａ・Ｉ』！？」

「今からこの能力の発動条件を教える。これは同じフィールドにいる召喚獣に触れ『同調（シンクロ）』と言えばいい。そして、姿は同調（シンクロ）した相手によって変化する。坂本雄二だったら今日みたいな感じにな。点数は自分の点数に相手の点数の半分を足した数字になり、４００点を超えれば腕輪を使える。ただし、仲間内でしか出来ない上に腕輪の反動はとても強く、かなりの精神力を必要とする」

「わかりました」

「上条当麻や一方通行とは同調（シンクロ）出来ないからな。それに一試合に3回までだ。忘れるなよ」
「は、はい！」
「話は終わりだ。土御門送ってやれ」
「わかったにゃー」

僕は土御門君と共に教室へと帰っていった。

「これからの吉井明久の成長が楽しみだな、彼にはたくさんの戦いをしてもらいたいものだ」

第１８問　清涼祭二日目　僕の秘められた力！？（後書き）

感想お待ちしています！

次回は上条さんが何かやらかしてしまうのか！？

次回もよろしくお願いします！

第１９問　清涼祭二日目　後夜祭での悲劇！？（前書き）

さて、遂に清涼祭閉幕です。ちょっと物語の展開が早すぎるかな？

今回は上条さんがやらかしてくれました。一体彼は何をしたのでしょう？

第１９問　清涼祭二日目　後夜祭での悲劇！？

今からＡクラスと合同の打ち上げだ。急いで公園に向かわないと。

「む、やっと来たようじゃな。あれ、当麻はいないのかのう？」

「・・・・一緒じゃないのか？」

「あれ？もう来てると思ってたんだけどなぁ」

集合場所である公園は、ＡとＦクラスのメンバーで一杯になっていた。だけど、当麻と（たぶん）一方通行（アクセラレータ）君がまだ来ていないらしい。

「お主ら、もはや学園中で知らぬ者はおらんほどの有名人になってしまったのう」

「・・・・・（コクコク）」

「まぁ、あの当麻と学年主席に一応だが勝ったんだからな」

「うん、そうだね」

「・・・ほんと」

「まったくだね～」

「「真実（翔子）！？」」

いつの間に隣にいたの！？

「はい、二人とも。これあげる」

真実が僕と雄二にジュースの入った紙コップを手渡してくる。

「あ、ありがと」

お礼を言って受け取る。見てみると飲みかけだったので少し恥ずか

しい。真実は平気なのかな？

「そういえば、秀吉。お店の売り上げってどうだったの？」

「うむ。高町が畳と卓袱台なら買えると言っておったのじゃ」

「う～ん・・・・。お客さんがあまり来なかったからかな？」

「いや。常夏コンビのせいだろう」

喫茶店だとどんなに人気が出てもお客さんの回転に限界が出てくる。暇な時間がもったいなかったかな。

「すいません。遅くなりました～」

と、後ろから姫路さんがやってきた。姫路さんも遅れてきたみたいだ。

「あ、瑞希。どうだった？」

「はいっ！お父さんもわかってくれました！美波ちゃんや皆さんの協力のおかげです！」

よかった。なんとか、彼女の転校を防げたみたいだ。

「姫路さん、お疲れ様」

「あ、明久君・・・」

ん？明久君？それに一瞬僕と真実の顔を見て微妙な表情になった気がしたけど、気のせいかな？

「明久君もありがとうございました！本当に助かりました！」

姫路さんなんか隠そうとしているみたいだけど―――

「すまん！遅くなった！」
「チッ、当麻がチンタラやってたからだろうが」
「お前ら何やってたんだ？」
「いや、ちょっと寄り道してただけ「違ェだろうが」お、おい！」
「ホントは何をしてたの？」
「アア。当麻が超電磁砲に追いかけられてたらちょっと面倒なことになってなァ」

～回想開始～

「さて、急ぐか」
「そうだなァ」

俺たちは今、アレイスターとの話が終わり打ち上げ場所に向けて急いでいた。

「アンタ！待ちなさい！」
「超電磁砲かァ」
「逃げるぞ！一方通行！」
「待てって言ってんでしょうが！」
「この類人猿め！羨ましいですの！」

なんで、白井まで！？よく見ると学校の方からいっぱい人来てるんですけど！

「上条君、私たちと！」
「こっちの方に来てくれるよね！？」

「ちょっ、上条さんは急いでるんでせうが！」
「皆！カミやんを潰すんだにゃー！」
「せやで！男の敵を潰せぇー！！」
俺が女子から逃げてると、土御門率いる男子たちが走ってきやがった。
「待て！俺は何も「「黙れ！」」何すんだよ！」
「俺たちは知ってるんだぜい、カミやん」
「そうや。カミやんが小学生に『パパ』って呼ばせてるってなー」
「それにこんなにもフラグを建ててるにゃー」
フラグ？何を言ってるんだこいつらは？確かにヴィヴィオには『パパ』って言われてるけど。
「覚悟するんやでー」
「皆、行くにゃー！」
『くたばれ！上条！』
「不幸だぁぁぁっ！！！」

☆

「さて、これぐらいでいいかにゃー？」
「ツッチー。戻るとしよか」
「た、助かった」
「じゃあ、用事もすんだことだしついてきなさい！」
「み、御坂「待てェ、超電磁砲」一方通行？」
「な、なによ」

「今からオレたちは行くとこがあるンだァ。だからコイツは渡せねェ」
「そういうことだ、じゃあな！」
「そ、そんな～」
なんとか御坂から逃げることができたぜ。一方通行には感謝だな。

～回想終了～

「と、いうことが実はあったンだ」
「そっか、当麻」
「ん？なんだ？」
「自業自得だな」
「ひどくないか！？」

当麻。雄二の言うとおりだよ。

「さて、俺もジュース買ってくるかな。一方通行は何がいい？」
「コーヒーだ」
「わかりましたよっと」

そう言って、当麻はジュースを買いに行った。

「なんか当麻のことだから何か起こしそうだよね」
「・・・・（コクコク）」
「楽しみだな（ニヤリ）」
「すまーん、遅くなった」

僕たちがそんなこと言ってると当麻が二人分の飲み物をもって戻ってきた。

「おおっと！」

「え？きゃぁっ！」

あ、当麻が落ちてた缶を踏んで、秀吉のお姉さんを巻き込んで転んだ。

「す、すまん！」

「・・・・う、うん／／／／」

あっちゃー、またフラグを建てたみたいだね。当麻、ご愁傷様。

「ホントにゴメンな！よいしょっと（ムニュ）あれ？」

「きゃああぁっ！！／／／／」

当麻が木下さんの胸を揉んでしまったようだ。

「・・・・当麻君。何してるの？」

「な、なのは。これは誤解だって！」

「・・・・・今からO・HA・NA・SHIだね」

「許してください！」

「木下さんを押し倒したり、学校の方では他の女の子から誘われてたんでしょ？」

「な、なんでそれを！？」

「はやてちゃんが教えてくれたの。覚悟はいいね？」

「・・・・不k（バタリ）」

今年の清涼祭は当麻の犠牲と共に幕を閉じた。当麻、「不幸だ」っ

て最後まで言い切れなかったね。

☆

「秀吉、どうしよう／／／」
「どうしたのじゃ？姉上」
「アンタのクラスの上条君のことが気になるんだけど・・・・／／／」
「今日のことかの？」
「それもあるんだけど。前の試召戦争のこともあるかな／／／」
「そうかのう。ライバルは多いと思うのじゃが」
「いいわよ！私は高町さんや他の人に負けないわよ！」
「ハハ・・・がんばるのじゃ」

こうして、上条当麻を巡るライバルがまた一人と増えた。

第２０問　強化合宿へ向けて！（前書き）

３ヶ月ぶりの更新です・・・・すごく遅くなってしまい申し訳ありませんでした＞（＿＿）＜

今回から合宿編です！

第２０問　強化合宿へ向けて！

新学期になって二ヶ月が経過した。登校し、鞄の中身をロッカーに移そうとした時、ふとあるものが目に入った。封筒？手紙だろうか？

《上条当麻様へ》

宛名には当麻の名前が書いてあった。

「――――っ！！」

ま、まさかラブレター？

「どうした明久？」

「と、当麻！？珍しいねこんなに早く登校なんて！」

「いけなかったか？」

「二人とも、何してるのじゃ？」

「なんか明久が隠し事してるみたいなんだよ」

ま、まずい！ここでばれたら当麻に怒られ（パサッ）え・・・・？

「なんだこれ？」

「《上条当麻様へ》と書いておるのう。どうやら当麻宛みたいじゃな」

「・・・おい、明久」

「な、何かな？」

「次こんなことしたらお前のありもしないことを真実に言うからな。わかったか？」

「も、もちろんだよ！！」

そんなことされたら僕の人生が奪われてしまうじゃないか！

「さて、開けてみますか」
「よいのか？わしらに見せても」
「別に構いませんよー。ラブレターなわけないし」
「「・・・・（ハァッ）」」
「どうしてそこで溜息する！？」

なのは、君の思い人はすごく鈍感だよ・・・・。

「まぁ、いい。開けるぞ」
「うむ」
「・・・・（ゴクッ）」

『あなたの秘密を握っています』

手紙の正体は当麻への脅迫文。

「・・・・不幸だ」
「・・・（ポンッ）」
「無言で肩を叩かないでくれ。余計に虚しくなる」

当麻、相変わらずの不幸だね。

「ところで何をネタに脅迫を受けておるのじゃ？」
「そういえばまだ知らないな。えっと、『この忠告を聞き入れない場合、同封されている写真を公表します』だってさ。写真って、これか？」

僕たちは封筒の中身を確認した。そこに入っていたのは3枚の写真だった。

一枚目はなのは、ハラオウンさんと並んで帰っている当麻。もちろんなのはに腕をつかまれている。

「バレたら処刑だね」
「そうじゃのう」
「いつの間に撮られてたんだ！？」

二枚目は当麻が秀吉のお姉さんを巻き込んで転んだ写真だ。

「あー、なのはが見たらまたお仕置きだね」
「うむ。あれは周りにいたわしらも怖かったのう」
「・・・・・・（シクシク）」

三枚目はヴィヴィオちゃんに抱き着かれてる当麻。隣には羨ましそうな顔でなのはとアインハルトちゃんが写ってる。

「これは処刑&お仕置き&ロリコン扱い確定だね」
「これで上条さんは二股でスケベ野郎でロリコンの三重変態野郎じゃないか！！！」
「当麻落ち着くのじゃ！高町がこっちに向かっておる！」

☆

「・・・・・ムッツリーニにでも相談しに行くか」
「そうだね。ムッツリーニ！相談が」

僕らはムッツリーニに相談することにした。ちなみに秀吉はなのはの足止めをしている。

「後にしろ。今は俺が先約だ」

「雄二？」

目的地に先に陣取っていたのは、僕らの悪友でありＦクラスの代表でもある坂本雄二だった。

「何かあったの？一応聞くけど」

「一応ってのが癪に障るが、まぁいい。実は今朝、翔子がＭＰ３プレイヤーを隠し持っていたんだ」

「ＭＰ３プレイヤー？それがどうしたの？雄二だって前に学校に持ってきてたし」

その後鉄人に没収されてたけど。

「いや、アイツは結構な機械オンチだからな。そんな物を持っていて、しかも学校に持ってくるなんて不自然なんだ」

霧島さんは機械オンチなんだ。初めて知ったよ。

「そこで怪しく思って没収してみたんだが、そこには何故か捏造された俺のプロポーズが録音されていたんだ」

「・・・・・・・・・・」

一瞬、先の召喚大会の準決勝シーンが僕の頭をよぎる。そういえば、あの時なんか言ったの雄二だけじゃないよね。

「しまったぁぁぁ！！！」
「いきなりどうした明久！？」
「あの時、僕も真実に言ったよね！？」
「ああ、確かに。「いっしょに如月グランドパークに行こう」ってな」
「まずい！」

あんなことしなきゃよかった・・・・。

「というわけで、ムッツリーニにはその台詞を録音した犯人を突き止めてもらいたい。さっきも言ったようにアイツは機械オンチだからな。密かに集音機をしかけるなんてできないからな。きっと盗聴に長けた実行犯がいるはずだ」
「・・・・・了解。・・・・・それで明久と当麻は？」
「一言で言うと当麻の命の危機なんだ」
「・・・・・何があったの？」

その疑問はもっともだ。

「明久、変われ。すまん、端折り過ぎた。要するにな――――」

――――事情説明中――――

「――――そんなわけで、その写真を撮った犯人を突き止めて欲しいんだ。あの場面で写真なんて撮るヤツなんていないから、きっと盗撮の得意なヤツがこっそり撮影したんだろう」

ちなみに見せた写真は後夜祭での写真だ。他のだとここで当麻が二

人にやられてしまう。

「なんだ。お前らも同じような境遇か」

「・・・・・脅迫の被害者同士」

「なんか不名誉だね・・・・」

そうやってそれぞれの説明を終えたところで、ガラガラと教室の扉が開いた。

「遅くなってすまないな。強化合宿のしおりのおかげで手間取ってしまった。ＨＲを始めるから席に着いてくれ」

そう告げる担任こと鉄人――――じゃなくて西村先生は手に大きな箱を抱えていた。その中にしおりが入っているのだろう。

「・・・・・とにかく、調べておく」

「すまん。報酬に今度（当麻の）売れそうな写真を持ってくる」

「僕も最近仕入れた（当麻）の秘蔵コレクションを持ってくるよ」

「おい、なんか嫌な予感がするのでせうが・・・・」

「「「気にするな」」」

僕らは急いで席に戻る。僕と雄二と当麻は特に目をつけられているので、こういった時ぐらいは目立たないようにしないと。

「さて、明日から始まる『学力強化合宿』だが、だいたいのことは今配っている強化合宿のしおりに書いてあるので確認しておくように。後、集合の時間と場所だけはくれぐれも間違えないように」

確かに集合時間と場所を間違えたらシャレにならない。学力強化が目的とはいえ、泊まり込みのイベントに参加できないなんて寂し過

ぎる。きちんとチェックしておこう。

「他のクラスの集合場所と間違えるなよ。クラスごとに違うからな。特に吉井に上条」

ひどい！どうして僕も！当麻じゃあるまいし！

「お前なんか俺に恨みでもあるのか？」

おっと、口に出てたようだ。

「いいか、他のクラスと違って我々Ｆクラスは――――現地集合だからな」

『『『案内すらないのかよっ！？』』』

「はぁ、やっぱり不幸だ・・・・」

あまりの扱いに全級友が涙した。

第２０問　強化合宿へ向けて！（後書き）

感想待ってます！

一つ聞きたいんですが内容で短いのを週１ペースで書くか、なるべく長めで2、3週ペースはどちらがいいですか？

感想に書いてください

第２１問　合宿所へＬｅｔ’ｓ　ＧＯ！！（前書き）

すいません！！

テストがあって、更新できませんでした！！

部活のない時に更新していきたいと思います！

第２１問　合宿所へＬｅｔ’ｓ　ＧＯ！！

僕らは合宿所へ向かうために電車に乗っていた。
Ｆクラスは現地集合なので皆といっしょに電車に行くことになったからだ。

「あと二時間くらいはこのままですね」
「二時間か。眠くもないし、何をしていようかな～」

辺りを見回すと雄二は暇そうにしていて、当麻はなのはとイチャついて（いるように見える）いた。
羨ましいやつめ・・・

「ねぇ、当麻・・・殴っていい？っていうか、殴るから」
「いきなりどうしたんだよ！？お前、大丈夫か！？」
「ふふふ・・・ｉｈｂｆ殺ｗｑ・・・」
「こんなとこでフランベルジュを振り回すな！！」

なんだろう・・・当麻を潰すことしか浮かんでこないや

「アハハハハハハ！！！！！！！！」
「このバカ野郎！！！！」　バキッ

あれ？　頬が痛いや・・・・足元がふらいついて・・・・・バタリ

～３０分後～

「う～ん」

「お、目覚めたみたいだな」
「雄二？　なんで僕は寝てたの？」
「あーー気にしなくていいと思うぞ」
僕の知らない間に何かあったのかな。
「皆、これやってみない？」
「高町、それなんだ？」
「心理テストの本らしいの、面白そうだからつい・・・にゃはは」
「明久に当麻。お前らやってみろ」
「わかったよ～」
「ああ、いいぜ」
「じゃあ、『次の色でイメージする異性を挙げてください』」
色か。何色だろう？
「『？緑　？オレンジ　？黄色　？ピンク　？青』だってよ」
「僕は『緑→なのは　オレンジ→秀吉　黄色→美波　ピンク→姫路さん　青→真実』かな」
「俺は『緑→フェイト、姫路、島田　オレンジ→ヴィヴィオ、アインハルト　黄色→ビリビリ　ピンク→なのは』なのは、なんで泣きそうなんだ？」
「何でもないよ・・・後で覚えといてね・・・・」
「怖ぇよ！！さいごは『青→なのは、優子』ってとこか。なのは！？顔、赤いぞ！？　大丈夫か！？」
「にゃんでもにゃいよ／／／」
どうしてなのはは赤くなったんだろう？

「雄二、結果を教えてくれよ」
「おう、緑は『友達』、オレンジは『元気の源』、ピンクは『昔からの知り合い』、黄色と青は――――なるほど」
雄二が僕らを見て嫌な笑みを浮かべている。異様にムカつく顔だ。
「次、行くぞーーー」

～数十分後～

その後の心理テストで、当麻が落ち込んだりして復活させるのが大変だったよ・・・・・。
しばらくして、

「・・・・・・（トントン）」
「あ、ムッツリーニ。おはよう」
「目が覚めたようじゃな」
「・・・・空腹で起きた」
「・・・・もうそんな時間か・・・・」

時間を確認してみると、今は1時30分。遊びすぎたかな？
「確かに頃合いじゃの。そろそろ昼にせんか？」
「そうだな。夕飯のこともあるし」
「あ、お昼ですね。それなら――――」
まずい・・・・嫌な予感が・・・・（ダラダラ）

「――――実は、お弁当を作ってきたんです。良かったら・・・・・」
予想的中。姫路さんが取り出したのは大きなお弁当だった。
好意はありがたいんだけど、それにはいい思い出がまったくないんだよね。

「姫路。悪いが俺も自分で作ってきたんだ」
「すまぬ。ワシもじゃ」
「・・・・調達済み」
「そういうわけだからここは、明久にでもご馳走してやってくれ」
雄二が僕に押し付けてきた。フフン、僕にだって対抗策はあるのさ！

「僕も惣菜パンを買ったんだ。だから当麻に分けて――――」
「俺には必要ないぞ」
「何！？今日、弁当忘れたって言ってたじゃないか！！」
「あーー。それなら、なのはがくれたから大丈夫だわ」
そんな・・・・当麻に押し付けてやろうと思ったのに

「おっと、手が滑った（パシッ）」
「ヤベ、箸落とした（グシャッ）」
「ああっ！パン！僕のパンが！」
雄二の策略と当麻の不幸によって僕のパンは無残な姿になってしまった。
雄二のせいでもあるが、当麻も当麻だよ！なんで、あのタイミングで箸落とすの！？

「あはは。気をつけてよ。まったく、食べ物を粗末に――――――」
「――――――してはいけないからな。これは俺が責任を持って処分させてもらおう」

「「・・・・・・・・・・！！（ガンのくれ合い）」」

「おっと、手が――――」
「滑らないようにきっちり掴んでおいてやるよ」

「「・・・・・・・・・・！！（メンチの切り合い）」」

「あの、明久君。良かったら・・・・」

姫路さんがおずおずとお弁当を僕に差し出してくれた。けど、中身がなぁ・・・。

「あ～、えっと、その～・・・・」
「アキ、良かったらウチのも食べてみる？」
「ちょうどいいじゃないか、明久。二人の弁当貰っちまえよ」
「そーだぞ（モグモグ）」

二人してひどいよ！　元はといえば、当麻のせいなんだから巻き込んでやる！

「なのは、僕もお弁当少し貰ってもいい？」
「うん、大丈夫だよ～」

当麻の弁当と貰った姫路さんと美波のおかずを交換する。

「おい明久！おま「いいから食べろって」（ゴクッ）」

さて、僕は安全に食べようと。

バン！！

『何の音だ！？』

バタリ（当麻が倒れた音）

『当麻！！？？』

何があったの！？

「もしかしたら――――あのね、アキ。実はシューマイには辛子が入ってるの」

「君はバカかいっ！？」

「まさか、島田の辛子と姫路の化学薬品が体内で融合したのか！？」

「えーーー！！そんなことあり得るの！？」

僕らが推測してる中、なのはやムッツリーニたちは当麻の手当てをしていた・・・・。

「明久・・・・。後で覚えとけよ（ガクン）」

『当麻（当麻君）！？』

当麻・・・・・ゴメンナサイ・・・・・。

第２１問　合宿所へＬｅｔ’ｓ　ＧＯ！！（後書き）

話の感想お願いします！

黄色がなんだったかはご想像にお任せします

合宿編が終わった後は普通の日常を描きたいのでアイデアがあったら提案してください

第２２問　合宿の始まり。　そして、事件の予感！？（前書き）

更新がおそくなってすみません！

では、どうぞ！

第２２問　合宿の始まり。　そして、事件の予感！？

気がつくと、俺は知らない部屋で寝かされていた。

「当麻、大丈夫！？」

明久か・・・フッ

バキッ！！

「何すんのさ！？」

「言ったろ、許さんと」

「待つのじゃ！済まんが一方通行と手伝ってくれんかの！？」

「ハァ、何してンだァ？当麻」

一方通行？なんでここに？

「部屋わけでよォ。オレ学力順で余ったんだよ。だから、ココに来たンだァ」

なるほどな。

「ところで、ここどこだ？」

「合宿所だよ」

「へぇ～」

この部屋に居んのは俺、明久、一方通行、秀吉、雄二か・・・ん？

「ムッツリーニは居ないのか？」

「覗きか盗撮にでも行ったんじゃない？」
「雄二に対してそんな台詞がサラッと出てくるのはどうかと思うんのじゃが・・・」

ガチャッ

「・・・・ただいま」
「おかえりムッツリーニ」
「・・・当麻。無事で何より」
「心配してくれてたのか。すまんな」
「僕のことは無視！！？」
「・・・情報も無駄にならなかった」
「情報だァ？何のことだ？」
「そういや、一方通行は知らないのか」
「アア」

～説明中～

「（なるほど、当麻の方は心当たりがあるなァ）」
「おーい、一方通行？」
「オオ、スマン。考え事してたわ」
「・・・犯人の手口や使用機器から明久と雄二は同一人物だと断定できる」
「俺の方は？」
「・・・まだ探し中」
「それなら、オレも協力してやンよォ。少し心当たりもあるしなァ」
「・・・・助かる」
「それで、僕らの方の犯人はだれだったの？」
「・・・・（プルプル）」
「まだ犯人はわからないみたいだな」

「・・・・すまない、けど校内に網を張っといた」
すると、ムッツリーニは試小さな機械をとりだした。
「・・・・・小型録音機。昨日学校中に盗聴器を仕掛けた」

――ピッ《――――らっしゃい》
スイッチを押すと、内蔵されてる音源からノイズ混じりの声が部屋に響いた。
「随分と音が悪ィな」
「校内全部を網羅したのなら仕方ないだろう。音質や精度に拘る必要は無いからな」
なんとか女子の声だというのがわかるが、人物の特定はできないな。
《・・・雄二と真実から頼まれた吉井のプロポーズを、もう一つお願い》
対する女子の声は・・・・。聞き覚えがあるな。
「しょ、翔子・・・！アイツ、もう動いていたのか・・・・！」
「僕のも頼んでるよ・・・！」
《毎度。二度目だから安くするよ》
《・・・・値段はいいから、早く》
《流石はお嬢様、太っ腹だね。それじゃあ明日――と言いたいけど、明日からは合宿だから引き渡しは来週の月曜で》

《・・・・わかった。我慢する》

「あ、危ねぇ・・・強化合宿があって助かった・・・・」
「タイムリミットが延びてたすかったよ・・・・・・！」
「・・・その後の発言から、犯人特定のヒントがわかった」
「なんだ、それは？」
「・・・お尻に火傷の痕がついている」
「なら、一つ手がある」
「言ってみろォ」
「秀吉に見てきてもらえばいいだろう？
「そうだね！もうすぐお風呂だし、秀吉に見てきてもらえばいいのか！」
「明久。なぜにワシが女子風呂に入ることが前提なのじゃ？」

それならいけそうだな。

「それは無理な作戦だな、吉井」
「どういうこと？一方通行君？」
「これの３ページを開いてみろ」

一方通行に言われた通り明久と３ページ目を開いてみる。えっと、

～合宿所での入浴について～
・男子ＡＢＣクラス・・２０：００～２１：００　大浴場（男）
・男子ＤＥＦクラス（Ａの一方通行も含）・・２１：００～２２：００　大浴場（男）
・女子ＡＢＣクラス・・２０：００～２１：００　大浴場（女）
・女子ＤＥＦクラス・・２１：００～２２：００　大浴場（女）
・Ｆクラス木下秀吉・・２０：００～２１：００　個室風呂？

「・・・くそっ！これじゃ秀吉に見てきてもらうことができない！」
「まずいな、手詰まりか・・・・！」
「「おい」」
「どうしてワシだけが個室風呂なのじゃ！？」

俺たちが作戦を考えてると、

―――ドバン！

「全員手を頭の後ろに組んで伏せなさい！」

はぁ～～、不幸な予感がビシビシするな～。

第２２問　合宿の始まり。　そして、事件の予感！？（後書き）

次の話では、ある人物が暴走するかもしれません・・・

出来たらもう一度年内に更新したいと思います！

第２３問　学園最凶の怒り、そして決別・・・・（前書き）

なんとか、年内に更新できました。

では、どうぞ

第２３問　学園最凶の怒り、そして決別・・・・

「全員手を頭の後ろに組んで伏せなさい！」

凄い勢いで僕らの部屋の扉が開け放たれ、女子がぞろぞろと中に入ってきた。

「な、なにごとじゃ！？」

「木下と一方通行はこっちへ！　そっちのバカ四人は抵抗をやめなさい！」

先頭に立つ美波が、咄嗟に窓から脱出しようとした僕らの機先を制した。当麻は動いて大丈夫なの！？

「なぜお主らは咄嗟の行動で窓に向かえるのじゃ・・・・？」

「仰々しくぞろぞろと、一体何の真似だ？」

「よくもまぁ、そんなシラが切れるわね。アンタたちが犯人だってことぐらいすぐにわかるのに」

美波の後ろから出て来たのはＢクラスの御坂さんだ。後ろの女子も腕を組んでうんうんと頷いている。

「犯人？犯人ってなんのことだよ？」

「コレよ」

御坂さんが僕らの前に何かを突き付けてきた。なんだろう？

「・・・・ＣＣＤカメラと小型集音マイク」

ムッツリーニが代わりに答えてくれた。
「女子風呂の脱衣所に設置されてたのよ」
ふむふむ。これが女子風呂の脱衣所に――――
「え！？それって盗撮じゃないか！一体誰がそんなことを」
「アンタたちに決まってるでしょ！？」
「違う！ワシらはそんなことをしておらん！覗きや盗撮なんて――――」
「そうだよ！僕らはそんなことはしない！」
「・・・・・・・！（コクコク）」
秀吉の反論に合わせて前に出た僕とムッツリーニを冷ややかに見る御坂さん。
「そんな真似は？」
「・・・・・否定・・・・できん・・・・っ！」
「ええっ！？　信頼足りなくない！？」
僕とムッツリーニが同じ扱いだという事実に少しだけ涙がでた。
「まさか、本当に明久君たちがこんなことをしていたなんて・・・・」
「アキ・・・・。信じていたのに、どうしてこんなことを・・・・」
「美波。信じていたなら拷問器具は用意してこないよね？」
彼女からは信頼のかけらも感じられない。
「姫路さん、違うんだ！　本当に僕らは」
「もう怒りました！　よりによってお夕飯を欲張って食べちゃった

ときに覗きをしようなんて・・・・！」
「皆、やっちゃいなさい！　アンタも覚悟しなさいよ！」
僕らが女子に攻撃されようとした時、突然心臓を鷲掴みされる感覚に襲われました・・・・

一方通行視点））

女子共が当麻たちに理不尽に攻撃しようとした瞬間、怒りが限界になった。

「・・・・・アヒャ」
『――――――！（ゾクッ）』
「一方通行君？」
「オイ・・・」
『キャァァァッ！！！』
「何逃げようとしてンだァ」
「「何よ！邪魔する気！？」」

超電磁砲と島田が叫んできやがる。

「テメェら、自分たちが何してンのか理解してンだろうなァ？」
「別に私たちは盗撮しようとしたこのバカたちに罰を与えようとしてるだけよ」
「そうよ！邪魔しないでよ！」
「オレはずっとコイツらと居たし、そンな暇なンかなかったぜェ？」
「目を離した隙にやったかもしれないじゃない！？」

チッ、聞く耳をもたねェ・・・・

「オレが止めるのはダチに手を出そうとするからだ。もしコイツらが厄介事を起こすならオレが責任を持って止めてやる」
「一方通行・・・・」
「今すぐに出てけば、今回は見逃してやる。残るヤツはオレと闘う気があるとみなしていいよなァ？」
「アキを一発食らわせないと気が済まないわよ！」
「そうです！やっぱり、明久君にはお仕置きが必要です！」
「アアッ！！？？」
「「ヒッ！！」」
「・・・・・アンタたち！ここは一旦退きましょう！」

そういって、超電磁砲が他のヤツラを連れて出て行った。島田に姫路かァ・・・・吉井がかわいそうだな
とりあえずあの3人は警戒しとくかァ。

明久視点））

一方通行君が居なかったら今頃僕らは、姫路さんや美波たちにボロボロにやられていただろう。

「一方通行君、ありがとう」
「気にすンな。オレの気まぐれだァ」
「まったく、一方通行は素直じゃないなー」
「今すぐ、テメェだけボロ雑巾のようにするぞォ」
「ごめんなさい！！」
「・・・・」
「雄二？」
「・・・・上等じゃねぇか」

少し怒りの孕んだ低い声が部屋に響く。
「え？雄二。どうしたの？」
「どうせあいつらはまだ疑ってるんだ。本当にやってやろうじゃねぇか」
「まさか、本当にって・・・・・」
「ああ。あっちがあんな態度なら本当に覗いてやろうじゃねぇか！！」

いきなり、何を言い出すんだ・・・・。

「雄二、霧島さんの裸が見たいなら、個人的にお願いしたらいいんじゃない？」
「バ、バカを言うな！　翔子の裸に興味なんかあるか！」
「もしかして、例の犯人探しかの？」
「そうだ」
「・・・・さっきのカメラとマイクは、脅迫犯の物と同じ」
「そうか。それは嬉しい事実だな」
「そうじゃのう」
「・・・・・（コクリ）」
「つまり、どういうこと？」
「俺とお前を脅している犯人は同じで、さっきのカメラとマイクが脅迫犯と同じ物だった。そして、覗き犯は火傷の痕があるという話だから――――」
「ああ、なるほど！」

そっか。全部同じ犯人の手によるものだったか。それなら見つけ出せば解決する！

「これで迷う余地はないな！」

「そうだね！　やってやろう！」
「当麻と一方通行も協力「断る」何だと！？」
「さっきも言ったが、オレは覗きに協力する気はねェ。そして、このバカに被害を食らわすつもりもねェ」
「そ、そんな・・・・」
「だから、好きにやってろ。オレたちもやるべきことがある。行くぞ、当麻ァ」
「あ、ああ。悪いな、４人とも」

そうして、当麻と一方通行君は部屋から出て行ってしまった・・・・・。　これからどうなるのだろう・・・・。

第２３問　学園最凶の怒り、そして決別・・・・（後書き）

タイトルほど一方通行を怒らすことができませんでした・・・・

当麻、一方通行と決別してしまった明久たちはこれからどうなるのでしょう

では、次回もよろしくお願いします

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4034t/

とある魔法の召喚獣

2011年12月31日16時57分発行